[illegible]山の[illegible]花[illegible]図会　四

ル 4
245
4

特
門 ル名4
號 245
巻 4

武蔵名勝圖會

多磨郡之部巻第四　府中領　世田ヶ谷領

目録

國分寺伽藍跡　七層塔跡 附心柱礎　往古三仏堂跡　薬師堂
西勝院　姿見ノ池　法華寺跡　碑石
古街道　恋ヶ窪村　傾城松　一葉松
泚塚　貫井村　小金井村　人見村 人見原 附 古戦場
古塚　浅間社　人見山　仙川村
仙川水源　仙人松　烏屋蒲　辨天祠跡
天神山　勝淵明神　大行院　什物 新田義貞ノ手簡 篠塚伊賀守ノ札文
深大寺村　深大寺　大門路　鐘楼　厄除大師堂　水盤　深沙王社　福満童子社　清水
蕎麦　絵馬堂跡　二王塚　弁天祠　吉祥天祠　白山社　大黒天祠　古瀧
天満天神社　寺宝　多門院跡　青渭天神社　砦跡

佐須村　粕江郷　亀粕神社　祇園寺
薬師堂　虎ヶ淵　粕江氏第趾　正覚塚
深大寺村 古石塔　金子村　野川　鐘ヶ山
寿福寺跡　金龍寺　五本松　国領宿
円福寺　布田宿　布田天神社　永法寺 禁制書
古天神　蓮慶寺　石原宿　要天坊跡
常久村　一里塚　深谷村
深谷塚　車返村　本願寺　薬師如来
彦四郎塚　第跡　是政村　廉済社
御茶屋庄　横山府史　皮干場　関谷塚
押立村　亀井塚　大丸村　九宮明神

円照寺　直指庵　城山　瓦ヶ谷戸
長沼村 小沢ノ合戦　常楽寺　毅恩寺 什宝　青沼明神
矢ノ口村　渋朱遊　妹山　穴澤天神
国安権現　威光寺　菅崖浦　梅元坊跡 古石塔
比丘尼塚　平尾村　椙山神社　観音堂
塚　阪濱村 古文書　三澤川　狸塚
薬師　高勝寺 什宝　妙見祠　世田ヶ谷領
飛田給村　大澤村　冨士塚　石付石菖蒲
和泉村　古塚　第跡　六郷用水
六所明神　泉龍寺　玉泉寺 観音堂　白幡明神
古大塚 九ヶ所十ヶ所　喜多見村　氷川社 棟札　禱善寺
慶元寺　宝寿院　喜多見氏第趾　同下石浦
蛇除秘符　宇奈根村　瀬田村 古文書　吉祥院 什宝

明照院　　鞴嶺明神　　大蔵村 古文書　　氷川社 棟札
乳竈松　　永安寺 古石塔　　池　　古松
塚 又ケ所　　相州道　　宇根本川　　石薬師
瀬田　　谷戸

國分寺廢趾

于今府中領國分寺村と号し府中驛より北に當て行程凡二十町許
此所に上古の大伽藍の跡ありて礎各大石にて列をなして其跡ハ
歴然として上古のまゝ也伽藍の跡二所あり丘陵の上に今薬師堂あり此所ハ
上古の伽藍の堂跡にて礎石の間を四間ツヽ並て一行に七ツ並にて二十八間なり横も
此数の如く並ひ二十八間四面なる金堂なりと見ゆ其礎の所に今又薬師堂を
安置す其地より南に一段低き地に大石礎是も数多列居し今ハ陸田となり或ハ
茅生たる所もあり大石動しかたく此所ハ上古の國分寺伽藍跡なりと云田圃の傍
に古への古瓦我等か積て塚をなす物ましく丈六の佛像并大伽藍の佛閣いつれの年
に成たる事実なりと記せるものに見へ次朝政おとろへ法闌ともに衰頽なり
おのつから腐朽して破壊をしるなし中古文安年中まてハ佛閣も殘りてありしや
鎌倉公方家の京都下向の御宿営となりし事ありて在り其頃迄ハ國分寺と
号せる寺ありしと

又云國毎に二寺造立ありて金光明寺と称し尼寺をハ法華寺と号せり國史にも毎國の
寺なれは國分の二寺と載られたると諸國同しけれハ末世に到り誰よ言ふともハ称せしに
國分寺と唱へて古跡に名の留れ上世此地寺なる事をしらすなりぬ中ころ法華寺
の跡いまた志らすといへとも國分寺の西に同様の古瓦の出る所あり其地を往昔黒谷
の仏像を掘出しゝ人地名を黒谷と唱ふ其仏像ハ六所の社地に安置するもの是也或説
に橘樹郡北門村新向寺ハ四讀にて異説の薬師を安置當國の法華寺の四讀ハ是く
といへと是ハ當國の薬師なるやしといふ説も記さこその時の年ハ志らかな
るし

國分寺縁起畧云
竊惟興廢必有時至天地の諸瑞靡不録旃矣夫當伽藍ハ
人王四拾五代　聖武天皇御建立天平九年行基大士の草創なり翌年
戊寅春三月修造供養導師ハ行基大德咒願の道慈法師なりと云云
其所営の尊容ハ丈六の釋迦如来丈二の藥師と阿彌陀との三尊なり
各丈六四面の寶殿に安置し東ハ奥州黨是を称して三佛殿と号す
又界内四隅に各方四丈の堂有り是に四菩薩の靈像を安置ス所謂
觀音文殊虚空藏延命なり佛量各八尺余なり四隅ハ四方各一百
八拾八間なり並に鐘樓有り西の方に樓門を開く北亦各高営なり
鎮護の社頭ハ六所宮又詔ありて大般若經金光明最勝王經等を納め
給ふ同十二年庚辰春三月詔玄昉大士造営を加へ給ふ界内の四維に五間四
面の殿を建て四天王の靈像を安ず皆各長七尺五寸余なり又巽の方に
ハ方三丈五尺にして七層の大塔を御建立金光明最勝王經等を堞門に
安置し給ひ寺を勅して金光明四天王護國之寺と名付為給ふ又ある年
經て康平年中源頼義朝臣奥州下向の砌冬十一月當寺に来り給ひ三ヶ日
軍旅を留め給ひて藥師經並金光明最勝王經大般若經等を誦せしめ給

ひて奥州に赴せ其日より同郷の東に丘陵有り甲冑の武士一人常に
北方に向ひ立る事毎日なり郷人怪ミ近く寄て見るに岩にて有しが其後
此山を名付て人見山と云ふ是なり（今ハ人見村の内にあり） 時に十二神將の内珊底羅大將
の神足汎土に深たるを見て則神將の軍臨を加護し給ふ事を悉り果
して新田朝臣軍勝利を得給ひ凱陣の御當寺に御證太刀等を納め給
こりふ治承四年秋文覺上人此地に來り護摩祕法を修せ給ふ事一百日依て右大將家
御兵運ありしとて元弘三年五月新田義貞上州に旗を揚げ鎌倉へ赴き誅之
給ふ時當國分倍合戰の御祈の為に古来の法堂悉く烏有となりしを
建武の初再営の為に義貞朝臣修造料三百石伽羅二百目寄進ありし
翌二年春三月造営既成同年七月供養を修し導師ハ祐賢法印咒願ハ
國分寺仙牧阿闍梨也云云　餘ハ畧之

續日本紀云
聖武天皇天平十三年正月三千戸施入諸國國分寺以充造丈
六佛像之料同年三月　勅曰毎國僧寺必令有二十僧其寺名
為金光明四天王護國之寺一十尼其寺名為法華滅罪之寺

両寺相去宜受教戒若有闕者即須補満其僧尼毎月八日必應轉讀最勝王經毎至月半誦戒羯磨毎月六齋日公私不得漁獵殺生國司等宜恒加檢校

同十六年七月詔云四畿内七道諸國別割取正税四万束以入僧尼両寺各二万束毎年出挙以其息利永支造寺用

同十九年詔云朕以去天平十三年三月十四日至心発願欲國家永固聖法恒修遍詔天下諸國國別令造金光明寺法華寺其金光明寺各造七重塔一區并寫金字金光明經一部安置塔裏而諸國司等怠緩不行或々処寺不便或猶未開基以爲天地災異一二顯来蓋由茲乎朕之股肱豈合如是此以差従四位石川朝臣年足従五位下阿部朝臣小嶋布勢朝臣宅主等分道発遣検定寺地并察作状國司宜与使及國師簡定勝地勤加営繕又任郡司勇幹堪濟諸事專令主當限來三年以前造塔金堂僧房悉皆令了若能契勅如理修造之子孫無絶任郡領司其僧寺尼寺水田除前入数已外更加田地僧寺九十町尼寺四十町便仰諸地墾開應施普告國師知朕意焉

孝謙天皇　天平勝寶九年勅封諸國國分金光明寺々寺別一千町同法華寺々別四百町同八年六月勅遣使於七道諸國催検所造國分丈六佛像

延喜式云

武蔵國國分寺料稲五万束　云々

七層大塔趾

國分寺廢跡より辰巳の方にて二町余を隔て其際にあり
田圃に侍る也

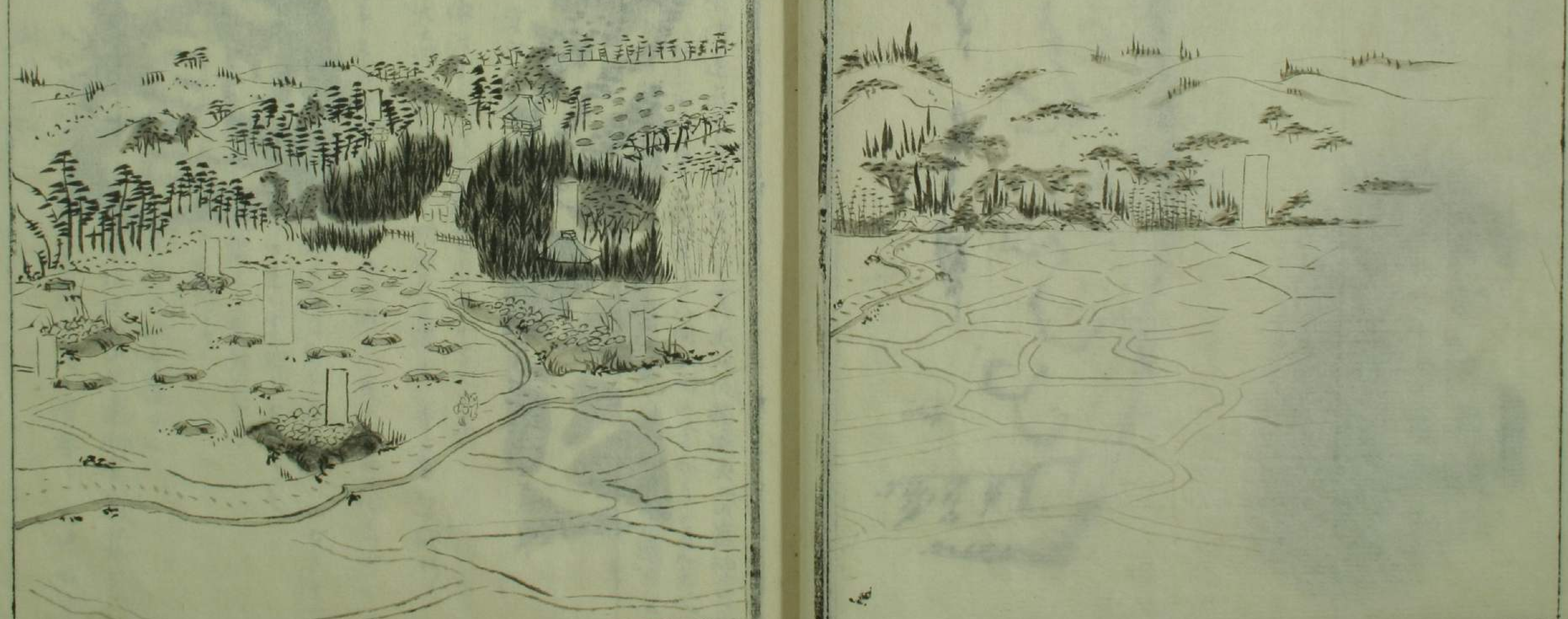
大塔心柱礎

于今淺田の傍に有り　平石にて其中に心柱の丸穴あり深さ三尺余穴差渡一尺余

此七重の塔ハ　聖武天皇天平年中勅願にて造立なし　然ハ又年暦およそ九十年程を經て　仁明天皇の承和二年雷火の為に災に罹り灰燼と成り同十二年迄十年を經て再建立と朝廷より命せられ事もありしかハ同國男衾郡の大領某朝奏を經て造立をしといふ其より又破壊の事ハ不知

續日本後紀云

承和十二年三月己巳武藏國言國分寺七層塔一基以去承和二年為神火所燒于今未構立也前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正之奉為聖朝欲造彼塔望請言上殊蒙處分者依請許之



往古三佛堂迹 天平年中御造立の金堂あり本尊ハ丈六の釋迦丈二の薬師ニ阿弥陀あり此三尊を安置ス古ヘ七八間四面の堂ありと見えて四間目に礎石一ツ宛在て一行ニ七ツ宛あり六八間あり此処ヘ今の薬師堂を造立せし時ニ此門の礎を取集て今の堂七間半四面を造営す其余ハ此堂の後ニあり容易に動しがたき大石也

薬師堂 中古以来造立なりし堂七間四面古への金堂の跡あり礎石の事ハ上ニ出せり

本尊薬師如来 木座像六寸二寸 往古之仏堂門の本尊之といふ
行基大士作 堂内ニ金光明四天王護国之寺と書たる額あり

日光月光 作不知應永七年造立 十二神 往古の神将ニて是ハ行基の作といふ
私業抄といふ古書に應永七年僧祖明といふもの日光月光を造立せし時古き十二神をも祖明か再錺を加へ言る事を忘るせりされハ十二神ハ古きもの也

二王門 二王長七尺 作不知 石階 二王門の下あり麓より此一級を登る
二王門まて又十五級あり

西勝院 醫王山國分寺と号ス薬師別當眞言新義 府中妙光院末之
御朱印高領薬師領九石八斗九升八合境内 松杉の山林薬師堂山の林麓に在

本尊大日如来 開山 上古の開基ハ行基菩薩其後ハ潰廃して中古未
開山ハ不知

碑石

薬師堂の前に有り近世造立せる碑あり

執権九代記

寛喜三年諸国の国分寺にて最勝王経を読誦しとの宣勅有りて民部大夫入道行然其事を奉行せる事を載たり武家の世となりても其事輟絶せざりし

鎌倉大草紙云

文安二年八月十七日永寿王殿京都にて御元服有て左馬頭に任じ成氏朝臣と称し京都より上野白井へ下向同十六日武蔵国府中国分寺に御宿陣同九月九日国分寺より鎌倉へ入のみと云云

按永寿王殿ハ古鎌倉公方持氏朝臣の御三男也京都将軍家より成氏朝臣を関東の主に定め此度鎌倉に入せらる也此頃迄ハ国分寺ハ大刹にて有りしこと見へ八月廿六日より九月初め迄御旅館となりし事也此成氏朝臣長禄元年の頃より恋ヶ窪村辺の間に移り古河公方と称せらるハ此人也

姿見の池

国分寺より僅に東の方村居の中に有り小池なり中に島有りて弁天の小社有り鳥居ハ村内往来道の端に有此処より池迄廿間程有り此池を名付て小野小町姿見の池と号せて往昔小野小町武蔵国迄来りし頃ハ日毎に姿を水鏡に写し見て面影の変しゆくをよろこびしといふ弁天ハ小町が持仏を祀るとぞ此ハ西勝院小寺僧の説あり

法華寺跡

此寺跡不知村内西の方にて国分寺跡より四五町を隔たる所より古瓦の土中より出る地有り国分寺の古瓦とおなしくハ其瓦に就て法華寺の跡なるべし国分寺の事ハ皆人の知る所なれとも此寺の事ハ称する人少し此寺も天平年中に聖武天皇御発願にて造立なさしめ給ふ所なり国分寺と此寺と二つ号して国分の二寺と称す毎年正月八日より七ヶ日の間此二ヶ寺に於て最勝王経を転読せ給ふ事延喜式にも見へ侍りぬ

古街道

府中本町より村界より恋ヶ窪村辺の間此村内を過る事凡四町程又中弐間村の西寄に有り是ハ上古の官道の跡也

恋ヶ窪村

此村ハ往古の官道にて府中へ出る駅次なりしが今ハ府中領と号し府中より川越に行道有り村の中程より少し南の方に当て往昔の駅舎の跡とて古瓦など多く畑中より掘出せる事有り又云鎌倉の繁栄せる時ハ此所に遊女町ありしとなん是又へにも傾城松など号せるも有り

廻国雑記云　准后道興法親王鎌倉より入間郡宗岡へ趣ける時霞ヶ関越て恋ヶ窪にて

朽はてぬ名のみ残れる恋ヶ窪今はた問ふも契りなりけり

傾城松　久米川へ行道八幡宮とて村持の八幡宮の傍に有囲一丈一尺許
又云此松ハ傾城町の界の松なりといふ

一葉松　囲五尺許往古の親木ハ枯て根株二つ有り右同村に有り
村長の屋敷に有り古街道の傍なり

古街道　府中より六町程府中より久米川道なり右同村に有
今ハ村せまき屋敷内にその跡あり

誕塚（よたき）　川越道の傍に有高サ七尺程国分寺村界に塚の謂を不知右同村に有塚の上に
板石の古碑あり
應永九年壬午八月十五日　了圭禅尼

貫井村（ぬくい）　国分寺村の隣邑なり古名温井（ぬくい）と書しが今ハ貫井の字を用ゆ
古記云應永年中武田陸奥守信光入道道成甲州を牢人し武蔵国府中邑に寓居せしハ此地なり武田信光此地に住居し　謂きハ禄寿にて持氏朝臣の幕下上杉右衛門佐氏憲入道禅秀謀反の時へ至て主君持氏と合戦起り終に禅秀方頭て一族余党の者罪を蒙りける此武田信光ハ禅秀か婿なりゆへ是も一味のよしなきハ持氏朝臣甲州へ発馬此時の罪を謝せんとて入道して初ハ高野山にのぼり其後又此地に蟄居し持氏朝臣逝去の後京将軍義持公御宥恕をもって甲州へ帰国世をハ弟刑部大輔信重に譲る甲州へ帰住の時此地の住人温井常陸介といふ者相従ひ其より温井ハ子孫の者甲州譜代の臣となる

小金井村（こがねい）　貫井村の隣邑なり或云上総金山の近邑に金井村小金井村あり
新田家の従士の居住の地にて金井小金井を以て氏に称せる人有り此
所も其一族の住せし地なりと云
又云此邑にて井を穿に土中より砂金のごとくなる微塵の末砂出るゆへ小角絞と地の名に呼べ来り村名とハなりたるよしをいふ又云井を掘るに砂金のごとき砂のおるハ此地にかぎらぬ是より前甲州府邑の村々にても千金太の金砂出るなり又云新田家以前より古き地にして上小金井村の内に建久年中以来の墓碑有り今ハ上下両邑となれり又云小金井といふハ下野守政の二支邑にして

人見村　府中駅より十八町を隔て東の方に当る
此村ハ往古武蔵七党の内よりおこれる人見氏の住居せし地なり
人見氏の人ハ猪俣党にして其初ハ横山党より出たり図説なき党を同しくせ
村内に上屋敷下屋敷なといふ地有り上屋敷といふハ村の西にて下屋敷といふハ
村の東にて何人住したる事も不知といへとも正慶の頃迄ハ人見氏住せし地なる
為し
系図云
横山武蔵権守義孝之舎弟　此義孝といふ人始て多麻郡横山庄に住ス

○時資ハ（横山孫三郎）―時範（猪俣兵衛尉）―忠兼（野三郎）

- 忠基（野太郎）―政基（河匂五太夫）―政經（人見六郎　此人始て人見村に住す是より子孫家とし）
- 猪俣　政家（猪俣小野太）―資綱（猪俣小二郎）―範綱（猪俣小平六　保元平治之乱に先陣ス一谷合戦討越中前司）
- 岡部　忠綱（岡部六太夫）―行忠（岡部六郎）―忠澄（岡部六弥太　一谷有軍功討平忠度）
- 人見　高經（人見小三郎　東鑑）―忠衛（人見四郎　平家物語　此忠衛ヨリ五代人見四郎入道光行元弘乱に討死太平記にアリ）―高行（人見六郎）―高綱（人見太郎）
- 行經（人見八郎　兼久記）　此人ヨリ人見氏分流ス
- 某（孫太郎）―光行（人見四郎入道恩阿）

人見四郎入道ハ正慶二年二月二日本間九郎資貞と同く先駆して赤坂の城にてハ戦死する事太平記に見えたり

上屋鋪　村の小名とせり此所ハ古へ人見氏住せし所なり下古塚一ヶ所あり此外に古塚四ヶ所今ハ百姓屋舗地となる高八九尺其いハれを志らず

古戦場　是ハ其地詳ならず觀應二年二月廿八日戦の事新田武蔵守光久ハ軍忠を中條よし又高麗彦四郎経澄の軍忠を中條小五於人見原狩野ニ合戦通裏記云云是等の人々尊氏将軍旗下なり

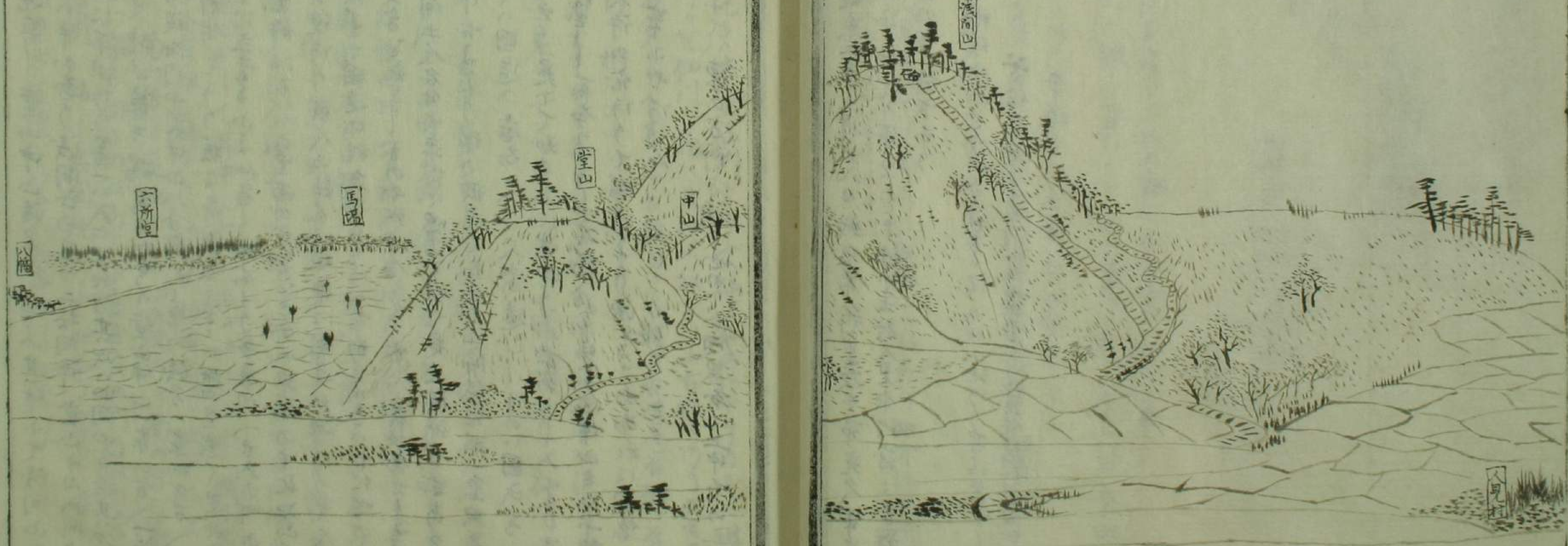
浅間社　小祠浅間山といふ神体銅像中山ニいふ小池の葉ニ清水の小池あり其清泉より出現せり里人霊験ありとて尊信せり旱魃の時ハ此霊像を清水へ持行雨を祈るかならず霊験あり霊像ハ村内幸福寺に在長一寸五分ものなり

観音堂　丘陵の如き山三ツ相並べり観音堂ありしゆへ堂山と唱ふ今ハ村内幸福寺境内へ其堂ハ移せり堂山にありし時の鰐口今の堂に掲置けり

鰐口　径七寸五分

武州多東郡
府中人見観音堂
天正八年卯月十八日
山城国　坪井久勝　寄進
再造従移本也
當山主當麻玄雪房
乃至法界平等而已

浅間山
中山
堂山
此三条の山を人見山と唱ふ



人見山

村の西寄に在三ヶ所流立し堂山中山浅間山と唱ふ其中にて浅間山を第一とす其二ハ堂山其三ハ中山なり浅間山の高サ二拾間許堂山十八間中山ハ拾間余あり其形丸くして山上に平坦あり第一ハ五六尺四方其次ハ四間四方程其次ハ二間四方程なり西の方ハ陸田にして地を築き揚たるが如く堂山中山ハ東の方へ一段低く三方へなだれ落り周廻凡二町歩程此内にて中山ハ分界など在り浅間ハ東の方へ一段ひきくなだれ落り山なり周廻凡四町歩余あり然ば寺異なる事ハ此四方悉く黒土なれとも山の土性ハ真土にて実に築立たる山に似たり此所より多摩川へ九丁余六町府中迄十八町余の方様山を距事三里許江戸へ六里西の方へ五里余の平原の中に此山ある事ハ一奇と云べし此山に附会の説あり或人の語るに那須に国造の碑ありて人是を称すれども碑面の文に因て考ふれハ国造の姓名なりともいふちかく是ハ古き塚の中にて其大ひなるを穿ち見ればいかなる文字を記せしものやありけんとて水戸義公掘せられし塚高サ十間或ハ十余間周廻五六十間土人名付て車塚と唱ふとの是ハ一段低き所あるのなり上古の塚ハ二段に築なり中古より塚の形丸くなれり一段低き所ハ祭典を行所なりといふ此説の山ハおそらくハ国造の墓なるべし又土の遠ひしものハ国民等がそれぞれ築たる事なりと誌せり是にておもふに中山といふ所のうしろより清泉出る所あるも浅間の祠縁出現せし所なりといふ其場へ入り見るに中山といふ林に水の出る所ありて頓き見るに一尺許の穴ありて塚中より湧出るさまなれば祠縁なるとを埋めたるをもて流れ出たる事にやありけん

仙川村

府中領に唱ふ郡の方位にてハ東の方野方領と世田ヶ谷領界なり上中下の三ヶ村となせり爰に出せし所ハ上仙川を記せる土人云仙川といへるハ仙ヶ谷の何やまりにて備考此地よ仙人住居をし傍に池水ありしを仙川と唱へ又仙人松といふ古松もあり又云此名にてハ谷の字をもやと呼事此辺に多し下谷保谷鞍留ヶ谷程ヶ谷堀ヶ谷[illegible]ヶ谷此辺にも世田ヶ谷祖師ヶ谷保谷などあり相州にてハ谷をやと呼なり

或云此邊の俚語に水の地中より湧出る所を谷といふ仙川水源の池往古ハ清水の湧出しは多く地中より吹出すなり是を千谷の池と唱ふハ清水の湧出せし頃よりぞ仙川の文字を用ゆといふ

仙川水源

往古ハ広き池なり今ハ葦葭繁茂して沼池の所僅に五六間四方よ昔ぬ下し深浅不知とされども四時水涸る事なく此池より流れ出るを仙川用水と唱ふ流村下仙川村給田村上下祖師ヶ谷村大蔵村鎌田村迄流れ出る所に田用水となり鎌田村にて六郷用水へ入古ハ此邊より玉川へ落入りしといふ

仙人松

沼池の邊にあり往古仙人の住し邊にあるゆへ名とす囲一丈五六尺許古へハ二股なりしが中古地際より三尺程上にて折し跡あり並て古松樹なり

島屋敷

上仙川村東の方に在深田にして其中に七八町歩の地あり今ハ雑木或ハ芽なと生茂り往古金子深山時光といふものの住居せし地なりといふ西の方に在り是ハ表になり南の方に花畑といふ畑の跡あり南の方ハ裏になる花畑ハ凡五六十間四方也其東に泉水假山の跡あり此島屋敷の内に往古寺一ヶ所ありて何もの頃にや涼大寺の境内に移し多聞院といふハ此所にありし寺なりと云又云屋敷に慶長元和の比染田三左衛門といふ人住居せし由をいふ

辨天跡

弁財天像七寸許此弁天を先年將監屋敷の内なる寺跡の土中を穿て掘出せし則その邊の田圃中に小祠を築勧請せしか社も破壊せしゆへ像をハ村長か家に蔵さといふ村長か先祖なりとの寄ち將たる故にや

天神山

將監屋敷の東なり天満天神の社ありしか今ハ此川村へ移せり其旧地なり

いふし〻梅の大木ありしか今ハ枯て朽根のみ残れり

又云此処より東西に塚切の空堀あり

勝淵明神

宗田氏此地を領せしより先祖宗田勝家を祭り勝家塚を埋しといふ又一説ニハ水神を祭りしともいふ

大行院

中依川村にあり本山修験聖護院末
小田原玉瀧坊觸下富永山と号す

本尊不動明王　木立像一尺余　慈覚大師作

此大行院の先祖依て木の商ニして富永助右衛門孫なるが江戸先達大光院の弟子となり大行院慶元と号し此処に往古文殊院と号せし修験者住りしか廃跡なりしを再興せしといふ

一

不動堂宝物

新田義貞ノ手旗一流
篠塚伊賀守添書　願文
此二品の写

一義貞手釣旗の圖

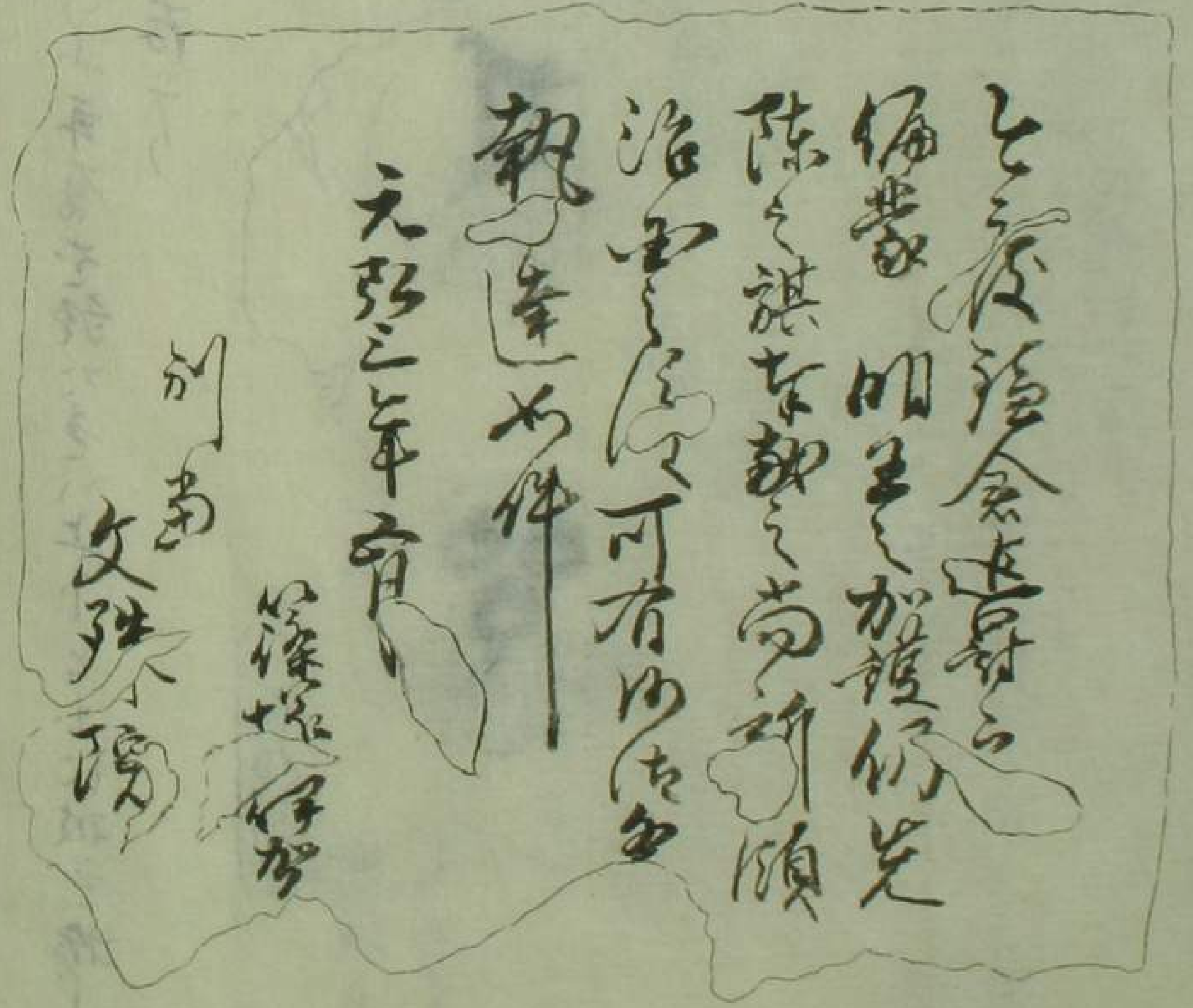
或云大将の手旗なりといふ年暦を經たるハ上下ともに破れを損して唯梵文の形をのミ存せり

長サ二尺二寸許　幅七寸許

地紋の丸綾なり

地ハ錦類地色紅紫色丸の内ハ白の錦地梵字ハ紺色蓮座ハ紺にて蓮葉ハ丸の廻りハ茶色のより糸二筋にて縫ふせなり

一篠塚伊賀守添額文


今度預金長寺ニ
偏叢明主之加護仍先
陳之旗本勢之旨所須
治世之儀可有御在々
執達如件
天正三年霜月
篠塚伊賀
別当
文殊院

深大寺村

府中領又ハ世田ヶ谷領ともいふ古刹の有る故に深大寺村と号せり永禄の小田原衆所領帳に拾一貫八百文太田大炊助深大寺在家分と見えたり

深大寺

寺領古 浮岳山昌楽院と号し天台宗東叡山末 御朱印五拾石末寺二十七寺門徒十五寺あり

本尊宝冠阿弥陀如来 木坐像二尺七寸 脇士 観音勢至 各木立像二尺三寸 慧心作

左右に天台大師 傳教大師 左の方に 不動尊 木立像四尺五寸 両童子 木立像四尺余 多聞天 木立像二尺 十二天の画像

本堂南向 玄関 庫裏 倉廩 表門 本堂正面の方より石階十五級九柱四足門之

裏門向拜済 表門の東西 大門路 左右茶店三四烟あり毎月三日十八日大師縁日にて参詣群集す正五九八市町の如し

一尺八寸に二尺余

本堂小揭 佐々木未葉

山路作左衛門尉寄進

正保四年 七月と有り但家書也

深大寺

開山満功上人 天平五癸酉年 記之

此寺當山の古刹にして別當職ハ僧正に補せらる 子院ニ大行事 并 塔中 十二坊ありしといふ

大師堂 東向四間に六間 本堂より西南の方也

厄除元三大師 本尊像八寸許 十一月廿四日御新供 今そ慈恵大師四十二の時自作しるふ像也 抑大師諱ハ良源ニ中俗姓ハ木津氏にて近江国浅井郡の人也 延喜十二壬申年九月三日出生し 永観三乙酉年正月三日寂せ依て謚元三大師といふ

唐銅燈籠 一基 高サ八尺許

水盤 堂の前ニ在

深砂王社 表門より一町程西の方に在本華表より堂社なゐに西門より八人の宮あり 祭礼九月十七日 此神躰ハ開山の作なり寺僧と秘して拝する事なし とそ日本ニ不の深砂王なりといふ

福満童子社 小社深砂王の南の方ニ在 祭神の次第しく縁記ニあり

辯財天 小祠 門前坤の方池中ニ在 大黒天の社と相向ふ

大黒天 小社池中ニ在 弁天の社と相向ふ

吉祥天 此高ニ号ける所なり表門より巽の方此高ニ社ありといへど 橋なし 是ハ縁記ニくはしく見へたれハ略す

白山権現 小社 大師堂の南ニ在

天満天神 小社 本堂の西ニ有

寺寳

六臂不動尊 智證大師筆

般若十六善神 恵心僧都筆

波平行安刀 一振 長さ二尺二寸

當山縁起 參議右中将藤原公尹朝臣書画 世田ヶ谷御所 吉良氏寄附

融通念佛繪入の記録 二軸 梶井宮尭胤親王 青蓮院宮尊應親王 両親王の御筆

鐘樓 二間四方 本堂の西凡二十間程登り山の上松林の中ニ有古鐘なり

銘文

敬白 武藏國多東郡深大寺奉治鑄推鐘一口長四尺三寸口二尺三寸伏以當山蒲牢開基以來革更其数不一或雖治鑄有破裂

而無聲或雖討得薄界而不鳴爰緇素數輩競勠力迺命冶
氏遂鑄鴻鐘當知三寶冥感諸天降臨仰願皇風永熖佛日
弥明伽藍鎮静法輪常轉重乞諸檀施主二世善願一切成就
仍昭銘功德其辞曰

寺号深大　山号浮岳
永和嘉星　南呂日擇
新鑄鳧鐘　声形卓窂
百千万劫　定期漸遡
驚起塵夢　消除煩濁
滅罪生善　令人正覺

永和二年丙辰八月十五日

大工山城守宗光
大行事院主法印權少僧都辨運
別當前大僧正法印大和尚位守慧

一深大寺縁記の写なり此縁記ハ往古よりの記にあらず慶安年中住僧の編集させる記なりとも附會としものなれハ是を志るさす

清水
当寺境内本堂の後ハ山にて皆杉の林之又六里先より見ゆる之其山林の南の方に寺在て山の麓なるハ清泉なりより湧出し本堂の西に弁天の傍より小滝なり夫より門前の沼池に入本堂の裏の池に入夫より表門の傍に小滝なり又深沙王の社地より又数ヶ所湧出し皆表門前通の池に入て流末ハ田に相成て大沢村ゟ当村へ流入野川に合流す

沼池
清水の池なり　是ハ五ヶ所在　本堂の脇表門の傍亀島弁天大黒の社地福徳の社の前皆

塔中
多聞院　本坊ゟ東に在
池上院　大門跡の先に在
真乗院　本坊ゟ西の方
法性院　当村慶寺あり
各寺領二石八斗宛配当すと

繪馬堂趾

村の小名を繪馬堂と呼ぶ往昔繪馬堂の跡なり
深大寺の東の方なり

塔の趾

今に塔坂といふを深大寺より
西の方にて字塔と呼ぶる地なり

二王塚

深大寺大門先なる二王を埋たる地なり
此所を二王坂といふ也

多聞院塚

前にいふ繪馬堂跡に傍り高さ七八尺許往昔多聞院を
殺て塚を築たるなりといふ多聞院ハ深大寺境内に移せり

古城趾

深大寺の南にあり一町程満つ高さ二三丈程上ハ平坦にして廣さ南北一町余
東西凡二町許東北の方ハ深田なり南の方城山の下ハ民家あり西の方ハ深大寺
の大門路へ續くり城跡なりに堀切と見へて空濠なとも見へたり此地より西を字
宿と呼し民家ありし往古城ありし時城下町の称ありしなるへなり

一天文六年四月武蔵国の守護扇ヶ谷の上杉修理大夫朝興か息男にて
同五郎朝定か江戸川越の手継の為に築りし所の砦城なり

青波天神

小社なり深大寺御朱印地の内にあり
深大寺より東へ二町ほどの滝の水を村の字に池の谷戸と呼ぶ
社地も狭く村の往来際にて社地続の際地を神木と呼し欅の大樹一株あり
周径一丈五尺余往昔この欅の親木ありしか古枯木にて枯て今は欅ハ孽なりとそ
社のまへに尾端に古池の跡といふ所ありて今なほくして谷合の如く見えて至て狭
く池跡ともみえたり往古深大寺境内より清水湧出るか如く清泉出たるより池と
いふさへ流出たる故にて其先ハ深田なり池の地ハ漸く幅六七間もあり
或云此社ハ青渭の神社なりといふ説あれともいかにも社地と見し記なく
社より池迄の間ハ僅迄にて二丁許なり星霜も久しく移り換りたりとも古神社
なるハ古き跡なしいかにへきなれと其傍ハ御もなし青波と呼ひるハ渭の字に似た
近に生を渭といふハ広さに波多つかしかたといへハ此おき谷間にありて四方へ六町
より十丁余の所西は衆波のおよする所なる故の名なりといへとも此説用ひかたし
依て次に出せる長沢村の条に矣ぎり

蕎麦

此地名産にて江都下河漏麺を製する食店に深大寺蕎麦といふ名を標
したるなりて今も此辺の苗なるかきりし近邑の新墾の地よりおすも皆深大寺蕎
麦と唱ふ此辺とも今ハ此辺より極上品にて彩そはをおさて京にハ村山御或を
皆根ヶ崎辺より七月に出るを調味他に美なり此地ハ古記名産也へ都下の人
多く其名を傳ふ

佐須村

府中領狛江郷此御名を久しく誤て柏江郷といひ古神社の名も虎狛と唱ふ此
狛の字の誤之其事ハ次に出せり
虎狛の神社の社号を佐須豊後と号しけるへに村名を佐須と呼ぶなるか也其事実
不詳社司佐須豊後ヶ子孫于今当所の村長にて深大寺完山なるとも此家より出し也
彼るの縁記に斬る由緒の古家なきハ今も佐須氏を称すへき事形りに彼家にて
今ハ貴井を以て氏とする也此事不審なり

狛江郷（こまえのがう）

此御名は古き事にて續日本後記に見へたるを始とせり 狛江といふ今井頭の池の
名ふして此邊に有る大ひなる泥池あるに名を上古に唱へしものと井頭と
号けし事は 御入國以来 将軍家こゝに題したまひしその名也
又云大ひなる江湖のあるゆへに上古の世は淡海國と号し其後は近江國と名付たるなれと
此古き御中に該地の古神社なり虎狛の神社と称せるあり古へ此御の廣き事
は三四里の余もありしと見へたり

一 狛の字をこまと訓せる事は上古我朝より高麗國を治して狛出（こま）といひ彼國へ使ひ
せし人を狛朝臣の姓を賜ひし事もあり我国より狛出と名付ひしは彼土を鄙く
称せるの謂となるへし中華にては三韓の地を濊貊と号すとは蠻貊を呼ひけるひは
貊ともいふ事は経典に見へたり 此貊も漢の世に一統して朝鮮と号し其後高句麗と称し明朝洪武二十五年我朝明徳三年一統して于今朝鮮といふ 貊を狛に同じなり にも
狛といひしありけるを高麗の別称となせり又新撰姓氏録に狛人師姓なりし人の名にも上古
狛麿といふ人あり

續日本紀云 元明天皇和銅四年十二月從五位下狛朝臣秋麿言本姓阿部也但當
石村池辺宮御宇秋麿二世祖比等古臣使高麗因即号狛実非真姓請復
本姓

又云元明天皇靈龜元年大神朝臣狛麿武蔵國の守になり任限中此地の泥池氾濫して
人民耕耘の害となりし此人への功を以て水路を引き其患を除しより民廣出田の功
を喜ひ此時より泥池を呼て狛江と称し後に御名となりて狛江郷と唱へたることもなく
狛の名のおこれる始とそ

續日本後記云 仁明天皇承和十一年武蔵國言多磨郡狛江郷戸主刑部直道繼（カドカベノアタヘミチツグ）
戸口同姓真刀自咩為同郷戸刑部廣主妻夫乃死居喪見其操行
可謂節婦特授位二階兼終身免同戸田租云々

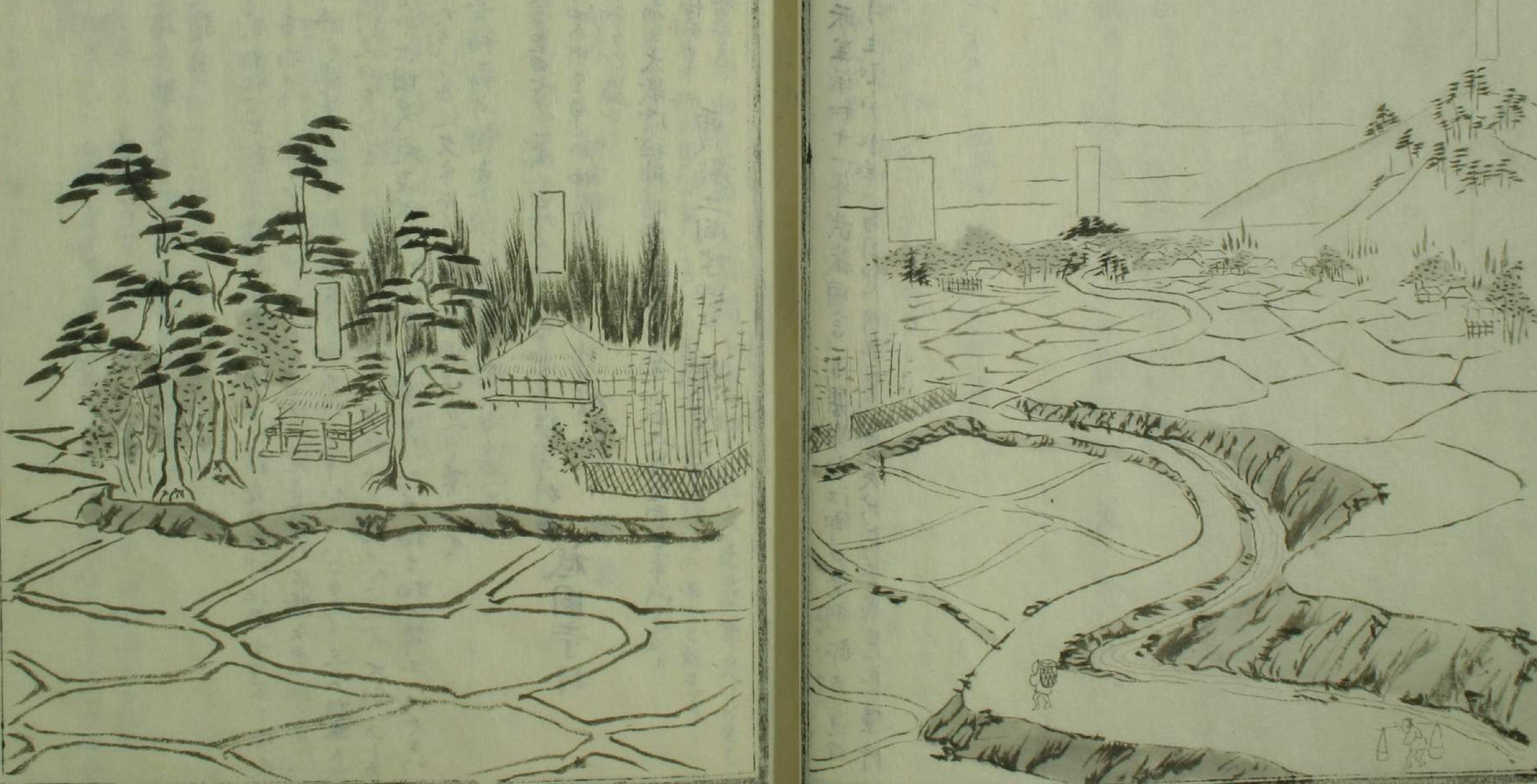
和名鈔云
多磨郡 狛江 古乃江 當郡中に御名十ヶ所の其一ヶ所なり

東鑑云
承元二年七月
狛江入道増西武蔵國威光寺院主圓海訴云去月廿六日狛江
入道率五千余人乱入寺領及苅田狼藉云々

按するに威光寺と号けるは雜司ヶ谷法妙寺の事なり于今彼寺の山号は
威光山と号けるは古への寺号の残りたるなれ 承元の比は実朝将軍の治世
なれはいまた日蓮聖人の出さる前にて何宗の寺か未詳 按又云狛江郷は
雜司ヶ谷近四里余也

武蔵國 七黨系圖云
高魂尊後胤西黨
由井別當宗弘四代孫
狛江太夫為時

此人始て狛江郷に居住し子孫狛江を以て
氏とせし東鑑に見へたる狛江入道も此人の後なり



風土記残篇云
武藏國多磨郡
狛江郷
貢諸禽鮮　又貢鞍馬之具及甲冑等
公穀二百九十三束三毛田
假粟百三十二乞
充諸司

右にいふ所は古書に狛江と出たる事如斯然古き郷里に該存の古神社なれは小名に依て虎柏神社と称ける事なるへし然るを虎柏と唱ふる謂れは延喜式神名帳に虎柏と見えへさるなり唯其板本の文字を讀て狛江の古き郷名なる事を考へさるなり又云板本は書籍多く誤字衍文のある事は僅なる小冊子にも其誤あり然るを況や大部の書巻中に於てをや六國史延喜式其外にもまゝ麁見えたり狛と柏と棒とはやまつて才オの扁書たかひある紀文字あり凡きは其過なるへき事にて康熙字典云狛音柏といへり因之ふして字形も又似たる也へあり

虎柏神社

神社往古は圭田七十二束と出たり村の西にて小社なり別當　祇園寺持
本より四ツ町を隔つ柏は今改て狛に作れり

祭神　惶根尊なりといふ
風土殘篇云大歳御祖神之崇後天皇二年己酉八月始而祭事行之云云

本社五尺　神体なし　白幣あり
覆殿二間半四方
社地松の大樹あり

祇園寺

虎柏山と彫たる横額を客殿の入口に掲く狛と柏とのたかひ來れる事久しく是を深大寺の古記にも柏の字を用ひあれは虎狛といふ事習俗の唱へと成ゆて
天台宗深大寺末日光院祇園寺と号す

本尊　阿彌陀如來　脇士　観音勢至
客殿　庫裏
開山　本寺深大寺同開山　満功上人　天平勝寶二年創立
寺寶　弘法大師真蹟　心経一軸

薬師堂

祇園寺客殿の東にあり九尺四面客殿二丈四方
此薬師如來は虎狛神社の本地佛也
本尊薬師　木立像一尺許　日光月光各同作　行基作
前立　薬師　木立像一尺余　日光月光各同作　恵心作

虎ヶ崗

薬師堂の裏の方一町程を隔て田の中に小高き地あり
此古は薬師堂の旧地なり土人虎薬師と称せしは

屋敷跡

村内小名上ノ原といふ所にて今は村長の屋敷に續きあり古への塔跡古寺跡なとも
見あたれは東福寺なとも出たる狛江入道といふ人の第跡にして該る稲荷
祠を建しといふ

正覚塚

村内の方に在る十八人塚といふも不知

柴崎村
府中領なり此所に柴崎村あり是ハ立川郷柴崎村と号し甲州街道にて玉川渡船場の辺にて爰よりハ四里余西の方にある大邑なり此処ハ小邑にて甲州驛國領宿より東に当り金子村の隣邑なり此村内光照寺といふ寺門に貞治七年康永二年延文五年正元三年其外にも文字見へさる碑石あり

金子村
府中領と号し 村内に甲州街道あり國領の東の方隣邑なり

此古此地に金子黨の人草創をし 地名へに金子村と号けし由縁ありしか 村内其旧跡なとも不知

野川
此川甲州街道にて長サ三間程巾壱間半許の石橋あり古人是を金子の馬場といふ此川の水源ハ国分寺村薬師堂山の麓に御手洗の小池あり其外に清泉所々より湧出し貫井小金井大沢深大寺の村々より池水出て湧出し夫より野川となり此處を流る是より世田ヶ谷領喜多見村へ入て六郷用水へ合流せり

經水山
金子村の字本山といふ所へ此地の山を經水山といふ麓に清泉ありて昔へいふ此昔源義經辨慶なと此清水を以大般若經書寫しおふに其大般若ハ于今楊樹般若村壽福寺にあり壽福寺古へハ此地にありし事なり故此處に壽福寺跡と号けし地もあり

壽福寺跡
同村字本山 經水山の西をいふ

金龍寺
深谷山と号し曹洞宗同郡山入村乾元寺末

御朱印寺領 拾三石四斗

本尊釈迦如来 脇士文殊普賢

開山岳應守英和尚 寛永中死去

此寺往古ハ壽福の由緒ある所過去帳に云当山開基明菴千光国師建保三年七月廿日ニ示寂又云此門に石像の十王壱尺四五寸是ハ古へ本山といふ所にありしと云村の小名に十王堂原或ハ十王堂下なといふ古名あり此石像の内生塚婆と一体紛失し今ハ四体を此寺に存す是なりといふ

八本松
金龍寺境内に林にあるハ一株にて五本あさきり園二丈五尺余此松の東の方に僅なる池あり往昔螺出たる跡也へ螺窪と唱ふ

國領宿
府中領甲州道中驛宿にて高井戸宿より此驛に至る但此所より布田五ケ驛と唱へ國領布田 下 石原 上 是なり西の方ハ府中驛に往還る壱ケ月の内を石原迄より月に六日宛五ケ所にて勤む

圓福寺
本誓山無量院浄土新宗京都西本願寺末なり此寺いにしへハ談念寺ともいふ

開山 開山和尚 永仁三丙子年六月十六日寂

寺傳に云此開山和尚ハ北條武蔵守泰時の弟関壽丸といひし人なりといふ其事実不知

本尊阿弥陀如来 木坐像一尺二寸 運慶作

寺宝親鸞上人爪彫阿弥陀三尊石碑あり日本三枚の内なりとぞ

布田宿

前に出せし如く布田五ヶ宿の内なり然れハ上布田と唱ふ地の名上古ハ尓布多と書紀式にハ布田とあり中古以来又布隠と書て今ハ又布田と書なり

和名鈔云　新田 爾布多

前条佐須村の処にて云同しく当郡中に見ゆる十ヶ所の郷里をいへり上古の世ハ此地とも多く其ハ境界を広き事にて和名鈔にも新田を尓布多と仮名を以て訓したるを今ハ言はまりて布多といふ然布多の二字も万葉の仮名なり字義に拘らす延喜式にも布多天神社とあるハ此地の社なり

一和名鈔に新田といふ郷名を仮名字を以て訓せられたる其仮名を取て延喜式に御名にも社号にも用ひられしより尓の字を省き布多とのミいふ事に通称となりしハ延喜式より始まりし事にて然るハ本字の新田の文字ハうち捨られ又云然ならハ古人のいふ調布といふものハ此処にて製し出せしゆへ此の地の名を布多と唱ふるなりと附会の妄説を伝ふ此説も多摩川のほとりなれは手作さらしといふ事によりて後にこしらへし杜撰の説を設けしならん地の名の布といふ字を以て附会せは調布は麻の布なれハ江戸の地名に麻布あり何そ布といふ字義によるへきや武蔵の調布ハ名産なれハ諸国のものなり信濃より出せしを名産とし兼て上総の望陀布とて其用になりし事ハ国史に出たり延喜式に上貢雑物の部に武蔵国布一千八百端とあるハ調布の事にて中男にて製し来りたり政事要略云武蔵国調布九百九十六端とも出たり皆一国中より上貢せし事を志るへし

布多天神社

上布田宿にあり甲州街道北裏一町許を隔
社地六反九畝廿分田畠四反分余除地なり

延喜式神名帳に布多天神社と出たるは此神社なり多磨郡八社の内なる古神社なれとも今は誹に小社となれり給ハ当郡中に他村に同名の社なし其外の神社は同名の社同郡中に而と見へたまへもいつれか其本所を失へる神社も有りある

祭神　少彦名命　垂仁天皇の御宇鎮座なりといふ

本社　覆殿　拝殿　石鳥居あり

社伝に云上古神社の地は玉川端に在けるが文明年中洪水の時流亡せしより今の地に移しまゐるといふ

永法寺

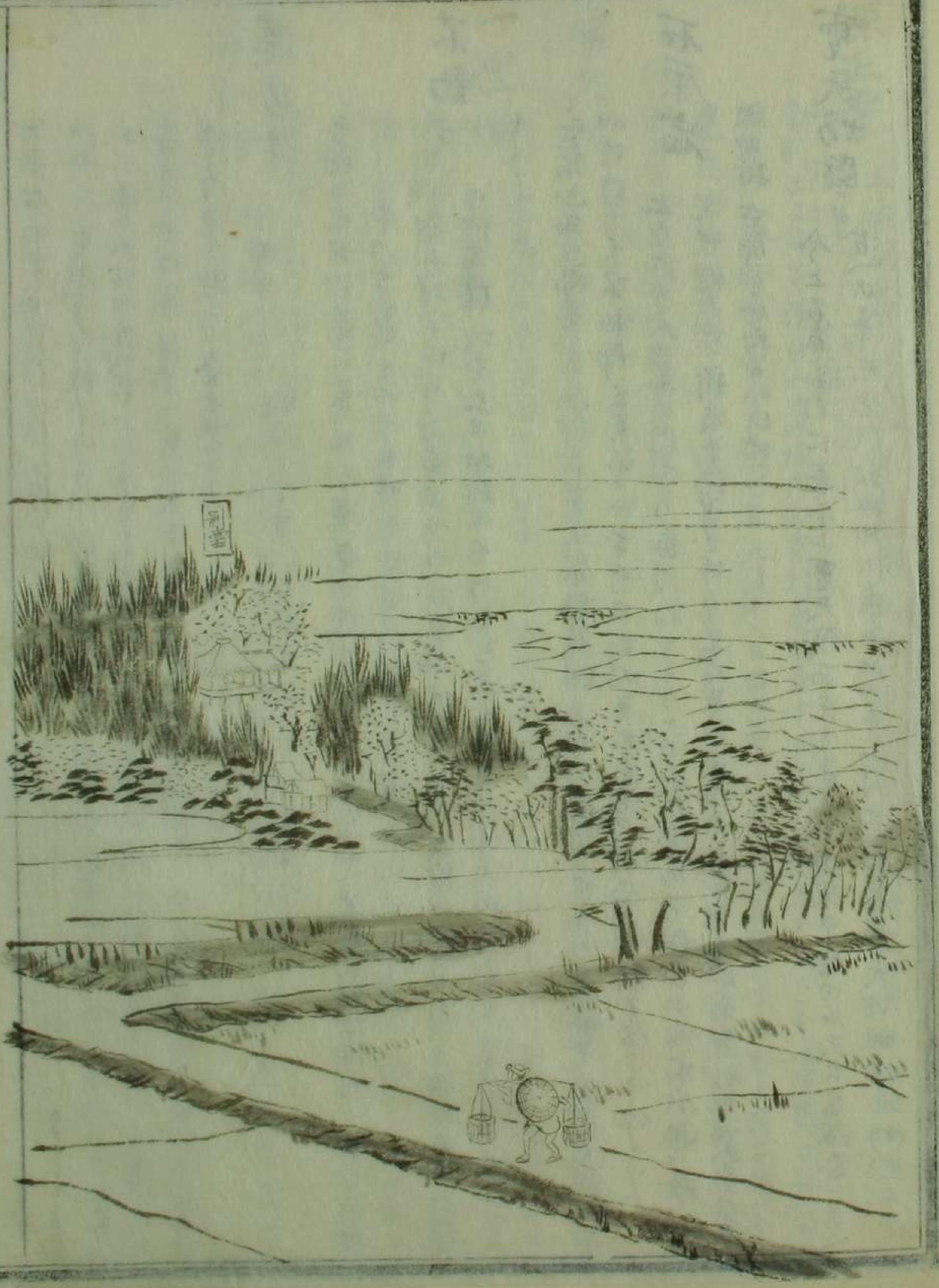
布多天神別当三反九畝廿七分
広福山常行院と号し真言新義紀伊根来麻生村王禄寺末之

本尊大日如来　開山不知

寺伝云往古笠原家の末孫にて永法房といふ人　一條院の永延年中此所に庵室を結ひし跡を改て広福山常行院永法寺と号しといふ文明年中天神社を今の地に移しける時此寺も同く移すといふ

古天神

同村内此所より南の方玉川端
往古布多天神鎮座の古跡



禁制　　　　武蔵国多東郡
　　　　　　　　補陀郷

一軍勢甲乙人等濫妨狼藉事
一放火事
一對地下人百姓非分之族申懸事
右条々堅令停止訖若於違犯之輩者
速可被處嚴科者也
天正十八年四月日
　　　　秀吉公朱印

此禁制書ハ小田原御陣の節御領中へ下し給ふ書なり　此村ハ御名補陀郷と唱へし事
こ見へたり　今ハまさに布田と書なり　此禁制札天神別当寺に在　郡中所々に見ゆ　或
に写し出さハ御名の時よ随ひて変化せし事を於世小象家の所所保に依を考ふれは
此意ニハ布田御と号せし詮ありて次ニ出ス

上下布田宿小名家のむかしは上下にわかれて一村なりし頃なり　御入国の後慶長七年に此街道を開かせ玉ひ既に寛永正保の頃は上布田町下布田町とも唱へけるよし小名家御帳に二百七拾四貫三拾文多東布田に甲宮拾地辻中條出羽守に行りさまこそ此名すべて布田とこそ唱へし事ども見ゆ上下分たれたる時は一村なりしておお羽守領せし事は下布田村蓮慶寺の條を合せ見るべし

蓮慶寺

下布田にあり　惺誉山と号し日蓮宗池上本門寺末なり

寺傳に云古へは真言宗にて閻魔寺と称しけるか天文元年中條出羽守檀越となりて改宗し本寺より第十四世日惺を請待し開山とし再興せしといふ

不動院

小島分村よりも上布田と下石原の間にて上布田宿に属し上布田月に六日の傳馬驛次を三日此村にてつとむ又小島某の給分の地といふ事にて村名はなかりしや

三栄山寿福寺といふ新義真言宗都筑郡麻生村王禅寺末なり元は此寺近邑上給村に旧地ありて不動院と号けるよし本尊不動明王木立像一尺二寸許朗弁僧正の作といふ

石原宿

上下行り二ヶ宿の内なり毎月朔日より六日迄傳馬を勤む小條御帳に拾弐貫文中條九郎新兵衛下総守とあり又石原内宮内分七貫文又石原惣領分六貫三百文

太田新六郎といへるは此地の

聖天坊跡

今上石原宿内に長谷山聖天院西光寺是なり御朱印十五石天台宗深大寺末也

古への事志るべし私按ずるに應永卅四年十月廿日石原聖天坊諷誦文あり

源正寺

下石原宿にあり小名御帳に六拾六貫六百九十八文詫時文四郎下石原源光名分といひしは此事なるべし

金剛山と号せり禅宗入山流橘樹郡菅村寿福寺末開山樹泉和尚天文九年四月廿六日寂せり

開基は太田対馬守正久天正七年二月十八日百九歳にて没す法名源正寺花居士其子播磨守盛具其後は民間に下り此地里長が先祖なりといふ古刀拾長刀等有れど家系はなし

古刀の銘鬼神丸国重とあり

常久村

村内に甲州街道あり

上石原宿府中驛の間の村なり小田原衆所領役帳に六拾七貫文深谷恒久太田大炊助とあり

一里塚

常久村の中程南の方畑中にて今の甲州街道より三十間余も隔て民家の後左右にあり

古相近きは是は慶長年中封築せしまゝなる一里塚にて其頃の甲州街道にありし

今の街道に成りたる年月は志れざれど此塚より東の次は布田五ヶ宿の内小島分といふ所に行り是は今も街道の左右に有り又此村の一里塚より西は古への街道は此知より六所宮の随身門の前へ出て夫より本宿村の内小野宮の小祠ある田圃の左右に行り是は前宿村の所に図をおしたり

深谷村

府中領村内甲州街道行り常久村の並び上下の二邑となる府中迄一里或は深屋

ニ書鎌倉右大将家の頃此地に深谷居し旧地と

一或書云性古藤原鎌足公玄孫深谷太郎大夫時忠といふ人あり此人は文武天皇御宇より聖武天皇の神亀年中迄関八州の総追捕使として東国を平治し武蔵国は府中深谷村と号けし所是其居館の地なり

相模国にては鎌倉に居館しけるといふ

天文頃の頃は深屋と書し事あり

深谷塚

下深谷村の地より左街道の南の方にあり塚高各七八尺 此塚ハ鎌倉の治世の頃深谷殿ありし跡を封して塚を築しなり

東鑑云

建久六年七月廿八日武蔵國深殿別當事被仰付安房上野房ニ是所別當事ハ近瀬房奉之云云

同

武蔵國深殿別當幕下将軍御計而以上野房為其職

同記に深屋刑部少輔といふ人も見へたり

車返村

府中領村内甲州街道あり深谷村の並びなり
古名白糸村と号し分倍河原にありしといふ村名の起りハ村内本願寺の縁起に見へたり

本願寺

八幡山と号し浄土宗同郡喜多見村慶元寺末
御朱印寺領拾一石四斗余

本尊阿弥陀如来 脇士観音勢至 作不知

中興開山 順蓮社教誉上人貞元良懐和尚 元亀四年六月十一日寂

中興開基 大久保彦四郎といふ者なり

此大久保彦四郎と号せしハ総州の郷士にして永禄十二年故ありて當所へ来り宗運薬師の旧地に一宇再建し江州安土の安貞上人の弟子天照山に居住せる山僧を招きて開山となして携へ来れる武具等を悉く埋て塚を築て何方へか去ぬといふ

薬師堂

本願寺境内にあり 三間四面

本尊薬師如来 開運薬師と号し木立像三寸許作不知

縁起云

正治二申年右大将源頼朝公奥州征伐の砌中道寺と号せる古刹に鎮守府将軍藤原秀衡持念せし薬師如来の尊像ありけるを畠山庄司重忠に命し其像を鎌倉へ移さんと車に積し来り當國府中駅に到るに鎌倉へ向ひて車を押おしけれとも曽て御車少しも動かざりしに依て重忠此所に留まり御堂建立なして安置せり
然るに元弘三年北條高時か舎弟四郎左近太夫入道恵性関戸口に

出陣し分倍河原に陣を取新田義貞ハ武蔵野に陣し数日合戦
ありける時兵火に罹りて堂宇不残焼亡せし其時当像ハ玉川の石上に
飛去給ふ其後草堂を安置せしに観應二年足利尊氏将軍矢
口に陣取給ひ新田義貞の次男義興ハ入間川に出陣し合戦の時師武士
大久保某小條の旅たりしに薬師の焼跡に一宿し其夜の夢の告
ありて我ハ此地の主人なり兵火の為に本堂焼失を危み我に運を
宗くの名あり守護し東海に計く廻しとなり依て玉川の砂場を尋
るに此霊像を得奉り上総國市原郡に至り此像を安置し奉り
し後同所の主の像を得て大久保氏ハ京都将軍義尚公より中國
にて領地賜ふ當寺中八世萬誉和尚發中に此寺に開運薬師ありと
告ありける其より望へ出て宮崎氏宅にて主人の傍にありし此薬師の事
を語るに本所石原若林氏に尋ねけしとの依て此事猶聞ふに我生
國ハ上総國なり市原郡に薬師ありし霊験を実及ひぬと語りき

其ハ我に来て市原郡より此像を得奉り今此寺に安置し
奉りけるとなり

彦四郎塚

同村門字上とりふ所の畑裏にあり高サ八九尺許
此人の武具抔納免し塚なりといふ本願寺記に出たり

邸跡（やしき）

同村門字諏訪山といふ所にて諏訪明神の小祠あり
其方小築地あり凡一町四方許の地なり住居せし人の事ハ次に出ス

編年集成云

慶長四年十月二日浅野弾正少弼長政封國甲斐國に有る蟄居台被
命といへとも長政於是急ぎ武蔵國にかう府中邑に蟄居住其子
幸長ハ大坂に在勤し不詳存謂抔を存といふ
此時長政ハ　神祖公より御覚を蒙り此地蟄居ありといへとも元より実東方なり
其生ハ又東行の輩長政か　神祖公へ内留するを悪こ秀頼へ対し深き御
非儀ありし抔揚て言上すといへとも実ハ又東行の面々か言ふハ
神祖公へ長政か倚頼するを妬む事ありしなく候と　公より表向きありの
御覚を蒙り其然を江城より召ス前不蟄居として云然に翌五年十月関ヶ原合戦
御利利にて凶賊悉く平均せしかハ長政東へ御ゆるし抔蒙り存謂を告げ
厚き御恩恕をもて其後常陸國笠間を隠居領に賜ひ彼地に隠居せしといふ
隠居領三万石なりとぞ

是政村

府中宿の地に相接し村内に甲州街道あり又玉川の流れもあり

村名のおこりハ當所に由緒ある古百姓あり其の先祖なる者の実名之と此家系によれハ元祖井田四郎左衛門尉是政と号せるハ畠山庄司次郎重忠の二男にして其父死ともに元久の乱に討死の砌幼かりし為へ家臣久米川彦七郎といふもの伴ひてこの所に蟄居し井田村に住居せしか井田を氏とし其後遙に世を経て小田原北條に仕へ井田左衛門尉是政と称す其子孫権右衛門尉是政が代に至て天正十八年北条氏照に属し八王子城を守り落城の後小宮永吉橋小坂等同姿世代随ひて府中宿に忍ひ此地に土着し民間に下り此処の村長となりし故村名を是政と唱へ来れる由を志るせり按するに古き書に載て慶永の比此邊に井田彦左衛門政家同姓朱印ありなとりふへ此国より初に往し諸公方家に仕へたる事を記せしものありさすれハ古くより此邊を領し其後ハ彼城落て旧領の地のへ此処へ蟄し　御入国後御一統の時々村名を改て是政と唱へ来りしものなるへし是政か実躰ゆへ小ハ古くより是らし旧領の地なるへし

鹿島太神宮

右同村字西裏にあり社地ニ櫻の古木あり社の地除き村持之

本社二尺八寸覆屋九尺四方木鳥居六尺

寛文年中古宮の下より往古の神体并本地の御像なと穿出し神体の丸銅鏡小年号江仁七年とあり凡九百年余の古社にして尊信すへき神社なりここも定郷にも志せるものなし神名帳に載る當郡中八社なれとも今ハその社号ハ伝はらされとも證とする古代の神器何れにても八社の内に此処にて出たる銅鏡なとの物文に見えたり

棟札　寛文辛亥年神体を穿出し新建の宮に移させと有り

一神躰の丸鏡に彫付たる西刑部宗弘といふ人は西黨より出たる人にて初めは西を以氏に称し其後駒馬の牧の別當職に補せられ由井御の地を領ひ夫より由井別當宗弘と号ス　由井御ハ今ハ由井領の地なり

系圖云

高魂尊後胤

西ノ黨　武蔵国七黨の内之

西大夫宗忠舎弟

宗弘　由井日別當二廳官

西大夫宗忠の子孫西氏を称し夫より又分流して住居の地を以て氏とす分流多し舎弟宗弘由井氏の元祖にして子孫由井氏を称す又此由井氏より分流したる族ハ柏江　田村　立川ホなり

御茶屋道

村の西の方にあり南へ通じ先年 御三代将軍家の御代迄は玉川新御漁として被為 成當村附玉川御漁場へ遊 府中御殿へ入御なり

横山屋敷

此地は横山党の人住居せし跡なり今も村民は横山を称する者六七戸あり 又此地は寛永の比開墾して横山新田と唱へ其後は村の小名と成ぬり 又云 此処は六所宮の神領にいれり

皮干場（かはほしば）

同村の東小田分村界先年 御馬具御用有て此地にて皮を晒し製せし地なりといふ

関谷塚（せきやづか）

高八九尺 甲州街道端にあり 是は先年村内百姓関谷才次郎といふ者明暦年中御仕置の刑に成りし地也

押立村（おしたて）

府中領或は世田ヶ谷領とも号し当地の領役を勤むといふ
此村は甲州街道へ不接玉川の南岸にて染谷村辺より西南なり

亀井塚

右の村内百姓屋敷門にあり亀井と号る謂れ不知
冢上に板石の石碑在文明十七乙巳年七月廿八日妙徳禅尼と彫て長サ二尺余

東鑑云 建長三年

押立九近大夫資能

此人当所に住し鎌倉将軍家に奉仕せし由古記に出たり住居の跡も不知

大丸村

府中領なり此村玉川を隔て南の方なり府中駅是政村なとの地と玉川を界として相対す此村より長沼谷の口百村平尾坂浜辺府中領と号して皆玉川越て都筑郡橘樹郡に相接せる村となり

府中領と号る村とは府中駅前哉御用の催夫をなし御用を勤ぬるゆへに其村とは府中領と号を但も内にも旧跡なき地は不記也

一或云此大丸村の文字は其へは大圓と書ておふまると村を唱へ又転化しおふまる村を此圓の字を用ひけるが近世は又文字を誤へて大丸の字に作れり古来の説の如く圓字なるべし

一ノ山。二ノ山。三ノ山。四ノ山。

此山の麓は玉川の河原にして玉川端より相望ミ山となくびて四ツあり西北の方より一二三の山といふ各高サ二三町程なり

丸宮明神

字東方といふ所 村内鎮守例祭九月十三日村内円照寺持 此寺社地山の麓にあり登り口石階十六級上りて石鳥居あり夫より十級登りて又六十三級登る其上社地平也

本社 覆殿 神体なし 白幣之祭神不知

此社は古神社にて中古迄大丸明神と書たるを近来は丸宮と唱ふる由是又此所に古き神社なるゆへに村名をも称せるなるべし旧記氷川の社の在村を氷川村といふか如く此所は大円明神の在（ます）ゆへに大円村と号せしを當村は玉川に臨みて武蔵国府の地なれは上古より玉川に渡船しといふは此辺の事にて其ところに渡津由しまして神社ありけん神名帳なとに載る大麻戸乃豆乃天神と号るは此社なるへし 大麻戸は則後世にいふ大圓の事なりといふ其理相當せり 又一説に麻戸といふは両岸の地にて上世よりの言葉にて八卜といふ義

なり麻の古ハよかうふ事ニて和名抄ニ多磨郡の郷名を太麻部とよませしも
〻の古ハニ通ふ事なぞこの辺ニ海岸ニても河岸ニても材木を其津ニ積置
所を九州辺の海岸ニてハバトなど唱ヘ関東ニても河岸ヘ材木を出し置ヘ此所
をドバと唱ふ又江戸の町ニも中買なる材木屋などが深川木場或堅川幷神田川
其外ニても河岸ヘ材木伐積置所を通用してハトバとも其訓を知まうるもの多し
実ニ上世より伝ふまう古訓なり故し此辺ハ国府の附ニて入津の場所ニ積置
の神社ゆへに大麻戸乃豆乃天神なるし　此天神なりハ祭神　大己貴尊なるとて
行なし

一当郡中八社の内大麻戸乃豆乃天神の社志くと知まうる所なくましいても同郡中ニ
今二ヶ所ニて此神社なりと号ける処行り是其旧社のたしかなるとさるべきへなり
其二ヶ所の内ニ御嶽山ニて大麻戸乃豆乃天神なりといふへとも御嶽ハ則金峰御嶽
の移なれハ金峰嶽神社ニて祭神ハ少彦名命之荒主ハ後ニ祀まつる事之大麻戸
の謂きなし　又氷川村の氷川神社ニても其大麻戸乃社号なりといふ是ハ素盞
雄の尊なるハ支所の説信用なりかたし　又府中六所宮の社説ニ大麻戸乃社号
を府中なりといふ按するに大麻戸乃姫神大己貴なりといへハ六所宮の内の一せハ
大己貴尊ニて又総社の謂きを考るハ擬合記ところの霊験行る古神社の神
を総行つまて祀まる社ゆへ小総社六所宮と号する事なきは此大麻戸乃豆天神
も往古大國村より移し祀たる事なやされハ大麻戸乃旧跡ハ此処なるし

或人大國の社ニ参り此地の事を　当社の事故
たつねて歌よみ送りける

おふ方との里の神てふ稲うり世のなかひよそうされまてにある

圓照寺

元宮の別当橘樹郡菅村寿福寺末　境内除地
済家五山派

寺宝

釈迦如来　厨子入木之像二寸七分程左右小添立
天竺西仏師十六歳の時の作
武蔵太守北山武蔵守源朝臣家信公寄附

午王ノ宝　印顆四寸八分毛生てかし　此の如き形なり
運慶作

境内
十王堂　本尊地蔵并　左右ニ十王行り
各二尺許

直指庵

同村字東方元宮の前ニ有り
本尊釈迦如来江戸門前新宿天龍寺持

開山　空堂大仙僧

寺伝云　元祖牧師越中守殿就之し同人書写しかふ大般若経全部有西小書たり
額　般若殿　開山空堂書

寺宝
十六羅漢　二軸　土佐筆
牧野家より寄附

城山

右同村より十二町程山上に空湟の如く廻りて五拾間許又高サ三丈七八尺程の上に平地あり古への跡と見へたり此山の林に古瓦の破多く出ると何人の住し事も不知

瓦ヶ谷戸

同村の西にあり古人云此古此地にて瓦を焼たる所ありと或云上古府中国分寺の瓦を焼し跡ともいふ

長沼村

府中より小沢郷といふ大丸村より東の諸邑にて玉川の北より小沢郷と号しるハ又諸邑矢の口村坂浜邑も皆小沢と云て橘樹郡と村々相接し此の邑ハ多摩郡の限として又古邑なり往昔長沼二郎太夫職任といふ武蔵七党の内西の党より出たる人当所に住し城地ハ村内報恩寺の境内ハ長沼氏子孫住したる家度發称之城地といふに行ハれ往古大人塚山と号す又小田原衆所帳に安田大蔵丞六拾貫文長沼と出たるハ此地なるへし

常楽寺

樹光山沢古院と号し天台府中安養寺末之寺本郷にあり
御朱印高七石五斗を領す

開山　慈覚大師

門彫物にて古代の物之六脚門
右慈覚大師作なり古き彫ものハ慈覚大師作といふ是必ずしも非なり
慈覚大師ハ関東へ下りし者にいふ

阿弥陀堂

寺より南の方山にありて方四間四面

本尊阿弥陀如来　木坐像二尺七八寸程　行基作

寺伝云境内西背の山を茶臼山といふ行基此本堂を作りかけし時此山に住ましとふ

報恩寺

大悲山光明陽院と号す黄檗宗宇治万福寺末之

本尊　辯財天　厨子入木坐像八寸許　弘法大師作

什宝

不動明王　厨子入一尺五六寸　真教大師作

往古大伽藍の霊場にして真教大師開山なりしが廃寺となり常に中古此地の朝倉氏霊夢を得て当寺を建立せり此境内を往昔ハ塚山と号し古へ長沼二郎大夫始て居住せしより長沼氏代々住せし地なり村の小名に馬場なども号す此地より城地を望二町もあるへし玉川を望む絶景の地之又山半腹に沼池あり弁天の石祠を安じ池長サ二間半巾六七尺余此池より白龍の大なるか出たるゆへ今に龍山と称し来るとそ又往昔行基茶臼山に住ましは此れ城用ひ身ふと云

青沼大明神

村内鎮守兼神　猿田彦大神之社司福島氏
例祭八月十五日字大沼といふ所にあり大門路一町程

覆屋四間半三間半在殿共に南向六尺の宮あり

土人伝ふ当社ハ往古大沼なりしに于今小名を大沼と呼し又赤沼とも呼ふ故

其所より出現しけるなり（赤沼明神と社号を称せりとぞ

一 或云青渭神社といふハ此青沼明神なりといふ説あり其いはれ旧記によれバ上古

ハ大沼なりしに于今字を大沼と呼し其続ハ古への其小流を以て所々村民耕作の用

をなし延喜の比式社にも列せられたるなりと 渭の字ハ字書に鼻波の貝と

ありしハ源大丸村の青波天神といふハ青渭神社なりしとて式人の紀りに志るしけれど

渭ハ本郷の和訓にハ鼻波といへる字義によれバ渭ハ沼と訓せり和名抄に上野国

利根郡渭田 奴末太と訓し今ハ沼田とかけり又前国比企郡の渭後 沼乃之利と訓し

今ハ沼尻とかけり是沼の神社にも此類ありて今ハ青沼と今称するハ古への青渭

なる本郷の古訓なれバ青渭神社なりといふ説あるべしと記せり

古戦場

関東治乱記云

武蔵府中玉川端小沢原合戦之事 此所ハ長沼矢ノ口坂浜辺を皆小沢郷といひ

此辺の合戦なりし事も押立是政辺より矢ノ口より玉川を越たるなりし

享禄三年の夏上杉修理太夫朝興ハ川越の城よりたびたび小田原の北條を

退治し先年の恥辱をすゝがんと難波田弾正町田荒人[illegible]宗徳の軍兵

三百余騎を引卒し武州府中へ出張と定(?)へハ此事ハ氏綱聞て何様の事ぞ

急遽押寄て打ち払ひとて子息小太郎新九郎氏康を差向らる

氏康生年十六歳未軍ハ今日始なりしとも父よすぐれて謀略ありて弓

馬の業も達者なり腕筋太く肉つき肩を広く人なり乳母子

清水小太郎を初として我よ劣らぬ若者ども今日を先途とかせ給ふる

同六月十二日上杉の陣よ押寄たりけれハ武州府中玉川の端小沢原と云

所よて一戦始まると見へしが大山の崩るが如くねぢつきて切て

蒐り追返し東西南北に打破り相戦ふ比ハ六月の炎天に草木も

ゆるがせて照日沼よ(?)たまりかねて責戦ふ疲れ息をも継かへども

命をかぎりと戦へハ天神地祇もあはれと見給ふにや今日の軍に

ハ小勢にて大将も若者を相従ふ若者ども皆強武者にて

敵を上杉を討んとて争ひ進む毎度上杉勢追立られ数々に敗

まけて引退く氏康ハ初陣に敵を追崩し物初よしとよろこび

勝関を揚て兵粮をつかひ小田原へ一ト先帰入ける

矢野口村

府中領小澤郷といふ古名谷ノ口とも書或ハ谷田村ともいへり元観応二年閏二月十七日尊氏将軍谷ノ口御陣同十九日人見原合戦と記せしもの在或云小沢七郷なりと注す稲毛三郎重成入道の旧蹟の地にして又重成一族の小沢左近将監信重といふ人なり此地七郷を合て領しけり由来此にもいへ一たり又云太平記なとに記したる新田義貞の次男武蔵上野の内に住居せし故畠山国清入道か謀計にて幕中の士竹沢右京亮良衡江戸遠江守か寛謀略をもて同十月十日武蔵上野常陸下総の士小将らして義興矢口ノ渡にある従者十三人間居を渡て渡舎に攻入らんとして遂に玉川の瀬中にて主従一時にそ横死せしといふハ此和あなり荏原郡の渡場にも矢口なれとも此ふて横死せし骸彼地に流れたるを里人川を揚て埋葬せし地にて荏原郡の矢口にて横死しにハあらし此和の矢ノ口あり上州より出て渡舎へ入へき間にハ此和ありといふ同名の地にて古事をさか称ハ其誤を傳へたる事も在ぬへし

街道

稲毛領より八王子への道也此地の東の隣邑ハ稲毛領にて多摩と橘樹と郡界之又南の方ハ都筑と郡界なり是より長沼大丸関戸一ノ宮へ出て行

城山

村の南寄に在穴沢天神社ハ此山の半腹に鎮座なり
山中に古井あり住居の跡なれとも姓名不知小澤氏の子孫の人なる歟

穴澤天神社

前条の城山の中段にあり社地除地山林社地九拾間に七拾間之除地畠二反余例祭七月廿四日九月廿八日
別当同村威光寺天満天神を合社とし社に天満宮の額を合社様殿左右にあり神体木像
像長七寸許別当不詳なり此神体ハ穴澤天神の像なりといふ古記本像也

天満天神の神体ハ渡唐の像にて立像一尺三寸許高麗郡野々の社司か著ける武蔵国四十四座の内多摩郡小野の社を穴沢天神社として祭神少名彦命なと記たり

一或人云寺に天満天神の縁起ありてこも此天神の穴沢天神の謂を何にても記せるあらし穴沢天神の記にも有けるに古社社頭廃せし事なる下其縁記に載たるにハ玉川洪水し民家すでに流亡せんとするの村民の小童に神寄て託せしハ今案するに穴沢天神なるへし此神ハ此地の神なきハ民庶の流亡し土地の荒廃せんとするを擁護せんか為小童に寄て託せるに神力にて霊験を顕さん事をいひ果して其験を顕したふ夫より民庶安堵を得し事なり上古の古神社にて霊験なりしを人勅して官幣を奉るひける神なれハ之又云記していふに我ハ是天神也と宣ひし事なれハ何も天満天神といふまし土俗の習ハ天神とさへいへハ天満天神と思ふハ今も昔も同し事にて皆今ある是といふも菅公の神徳の致す所也

國安大權現

同村内字谷戸社地除八百五拾坪　例祭八月十一日
祭神　大己貴尊　社司山本氏

神体丸銅鏡　径六寸四分
上ニ神像在不分明

大願主
山本権律師放信
應安六年八月十一日

縁記

當社ハ往古小沢左近ノ尉因高此地順抱の砌白髪の老翁　椋の樹の邊に

出現しゐひ國なるに守らハ我ハ是大國主命也萬民を國安かうしめんと守ふ事ふ法の如く是を思識こゝしに宮地造営しゐひて國安の宮と号しまつるとぞ神体ハ大國主命となり此神七名あり則大己貴命の別号又大國王ともあ孫とぞ

威光寺

草厚山と号ス真言新義坂浜高勝寺末
宍澤天神別當

本尊大日如来

開山不知　二世　恵範法印

藏屋浦

同村内字谷之介在國安社の小の山谷あり
小沢藏屋敷と号ス其由来不知小沢氏城趾を築せしの旧名なるべし

石碑

古此屋敷今堀出ス長三尺許
板石逆修の碑あり

明樂院塚

字中峰の前にあり十間程合を至
高サ四尺程許程明樂坊の塚といふ

平尾村

府中領と号ス此村当郡の東南の隅にして又東西南の三方ハ橘樹と都筑の両郡小様まれり往古ハ此邑都筑郡なりとも又村内浜宮の松山神社の棟札にも古ハ都筑郡なる事を記せり東の隣邑ハ橘樹郡の金程栗細山なり又南ら西近ハ都筑郡の古沢大友田片平栗木黒川の四ヶ村之実に往古ハ都筑郡の内なる面に形地なり

椙山神社

村の中央にあり村持なして同所宝泉寺持
例祭九月廿八日

或云松山神社ハ都筑郡の内にて式に載たる一座の古神社なり依々に都筑の内四村小相並て松山神社あるといへども何れか上古の社地なる事分明ならず神器古縁記等も何方にも不見なり此神ハ日本武尊を祭神として本地佛ハ皆不動尊を以てす当所も嚮に都筑の地なるゆへに叙郡中の古神社ゆへに勧請せし事なるべし後日本後記云仁明天皇の承和六年此神大護の事あるを以て官幣に預らしむ後ハ其後も位記を授けしなるべし

本社 大間社上屋あり　**石階** 鳥居の内二十六級又社前に六級あり

社樹 松の古木一株在鳥居の外に特立ス龍鱗蟠根屈曲して数十百年を経たる古木なり
圍一丈二三尺許其余松杉の社木茂林なり

神体鐵丸鏡 徑九寸六分表に不動の尊像あり
裏銘文　武州児玉郡金屋住人中村五郎左衛門家吉敬白
延徳二年壬午五月五日

當社は正保三年の棟札に武蔵國都筑郡平尾村あり　正保の頃迄ハ都筑郡に
ありしハ其後寛文の頃當郡に屬したる事なる歟

観音堂

村内宝泉寺境内にあり
本尊十一面観音 木坐像 五寸許　行基大士作

塚

村の西南の方にあり高サ六尺許
俗に塚と号く

阪濱村

小澤郷諸岡庄府中領と唱ふ
橘樹都筑と支郡の界に接す村名の文字は今ハ坂の字を書てさかと唱へ乃ちハ
都筑の方言に坂の事をさかと唱ふる事ありし嵯峨と坂とを誤まる事はせ又一説に
此れは古へ武蔵鐙を作りしもの住せし地なるをもて之より武蔵鐙ハ當村人の造る所なり
とも云ハ按するに其鐙師の先祖なる當村人の名などより初りて村名に傳へしは更に傳
ふる事もて信用ありがたし

一 北條家の臣當永孫左衛門尉主久へといふ人小田原開城の後元和の頃の地なるをハ當所に暫く
蟄居し其後子息主膳正光長　慶長年中
幕府の諸士に被列夫より寛永年中江都へ移住し此地に其舎宅なる者土窟し
于今子孫ありて武器并上杉謙信書翰を所持し写ハ次に出せり

三澤川

水源ハ同郡小野路村谷合より流出し東流して都筑郡黒川村より上谷川流合
此邊へ百　村長尾村へ至り玉川に注ぐ

鐙野

村の小名なり傳へいふ此邊ハ往古鐙の住せし地なるへ名に唱ふといふさなるハ古の
名處なり武蔵鐙と称せしものなり人其鐙師の祖ハ當麻出より始化せしなり

孫あり又云武蔵鐙ハ六鐙の事にて其製軽くして軍用に便よき事由へ用ひ來たる製
作なりしハ諸説ありとおもはれし詳ならす猶も或説云
光仁天皇の宝亀十一年勅して諸國にて造れる年料の鐵甲冑皆革を以て作らしむ例の
如く上貢せよ革の製ハ卵を累て堅牢なり箭は中て貫きがたし其製作も成まし
この事を以て諸國へ命しめひし頃鐙も又堅きを用ひらましよりて當村人工夫を以て
作り出せしものならんといえり

鐙塚

右鐙師の處にあり古へ鐙作りの住せし跡を封し
築たる塚にて高サ七八尺なり

高勝寺

右同村にあり岩船山大智院と号す真言新義
境内九畝歩崇福寺六ヶ寺門徒十三ヶ寺

本尊大日如来　祕佛　應安三戊申年　客殿庫裏　樓門

開山鎮海法印　應安八年乙巳年二月十一日寂

寺宝

六字名號　弘法大師筆　一軸

般若心經　右同筆　一部

地藏堂

客殿左ノ方にあり岩船山と号す本尊ハ地蔵菩薩安置に係てあり
當体木立像八寸許　弘法大師作
寺傳云日本三体の岩船地蔵なりといふ

古石塔一基

應永廿二年六月一日とあり梵字一點有外に文字なし
青黒の板石 地際より二尺七寸巾一尺一分厚一寸

永禄十三年三月冨田の大中寺に小田原の早雲寺にある所の札を以上杉不識庵謙信へ後北條氏照より書簡を通せし
返翰なりし此年四月改元ありて八月ハ元亀元年の八月なり 此文書ハ氏照に属せしものにて此書を見る時ハ是也又是此村旧
家井田氏なりて此書に天正十八年八王子城落去の時井田摂津守ハ冨永等と橋本に同居居住せしに感状すと記し 按るにハ
此冨永氏の事なり

就一札并渋民部丞父子
既被仰付輝虎心腹之通
天用済中被仰候神名
血判中合候上者毛頭不楽
首尾為其以向後無二可被
申談候入馬之事向甲
出馬之儀涯分可調候
兼而可被得其意候
恐々謹言

[illegible]文月六日　輝虎

北条源三殿

姉見社

同村といふ地よりハ此所ハ南の方ハ經筑紀ふして小沢郷府中領なり社地山林除地

別当ハ同村神王山姉見寺と号し天台宗東叡山末之

神体

本像にて常に扉を開かず

別当も評十七年を不済といふ

麓より石磴十四階登て鳥居あり又夫より百七十階登て平地あり其所ハ凡二百五十歩許もありて又石階百級あり夫より三十歩許よりして本社に至る石階合て二百八十四級あり社前に石燈籠石鉢あり鳥居に堅額あり熊川禎謹書と記せり

一 此地ハ皆土山よりして經筑ヶ岡に連続し高山によりて西と北より東ハ日光山筑波山等房総の辺山ハ雲とひとしく此余目に遮る山なきハ千里一瞬なり近くハ稲毛領の水田又多摩川の長流ハ山下に帯るが如し南より西の方を眺望すれハ渚きら原ハ經筑ヶ岳につゞき四方を望むに見え絶景の地なり行人が此地に住し此山を見て姉見等を勧請せし謂れと伝へ侍るとかや

世田ヶ谷領

此地ハ当郡の東南の堺にて又橘樹荏原の郡界なり

西ハ府中領小ハ野方領なり

又云府中領の中に接れて世田ヶ谷領と号ける村々三四ヶ村押立村大沢村上下飛田給村なとハ村々ハ世田ヶ谷領の地なるゆゑして府中に在る地なり其子細ハ不知なり世田ヶ谷領と号ける謂れハ当郡に世田ヶ谷といふハなくて荏原郡に有り彼地に駒ヶ原といふ地ありて漸々たる草原なり 駒ヶ原又駒場とも称ス

将軍家御放鷹御成の節其郡領せる村々より御用の備夫を出せり此辺へにその号

ありといふ一説ニハ鎌倉公方持氏朝臣の時吉良治部大輔治家世田ヶ谷郷を領し住居年久しく其後小田原北条氏当国を領せられし旧地を除へ所をしらハ土人もとの吉良御所と称せりといふされども今ハ駒場　御成御用の催役を勤るを以て斯ハ号するなり村数当郡中に十七八ヶ村あり

飛田給村

此村上下二邑と分れり地界ハ上石原と下染谷村との間なり甲州街道にあり

田一ヶ谷領といふ

或説云悲田給なるべしといふハ悲飛同音にて悲の字ハ村名故に用ゆるに憚ありかねハいつの比よりか斯ハ書たるにや其悲田給なるへきハ往昔の事なれハ此地の古き事哉知るべし

續日本後紀云仁明天皇天長十年五月武蔵国司言上に当国より上野下野信濃其外の国々へ公私ともに往来する行路の旅人ハ途中にて武蔵郡の勝れたる等の地にあって飢病の時中路にて人家絶て難儀するもの多し依之入間と多磨との両郡の界に悲田所を置て家舍を建て其備へにハ当国公廨の稲穀を以て充其用為飲食資一云云勅して是を許し給ふ命けると是を以て考るに此悲田所の給資料事にて悲田給の地と称したる古名なるべし末の世までも伝へし事なるべし

大澤村

菱刈庄世田ヶ谷領なり府中領の中に入交り深大寺村の西に隣りし地之此邨ハ地形中低き地にて卿林丘陵在て所々より清水湧出せり

冨士塚

大沢村内字羽根沢臺といふ所にある高サ一丈許頂上二間四方程此塚ハ先年此辺甲府様御鷹場にて御立場になりし塚なりへに于今村内にて女人を不登ゞ富士浅間を祀るゆへ今ハ斯唱ふ

古碑 一基

長サ三尺許の板石にて村内百姓屋敷内を流るゝ野川より出る百姓弥兵衛といふものに夢中の告あり廿三夜にて可出との告を果して野川にて流れ石より掘るといふ

石面上に梵字あり

品

奉月待供養

寛正五年
甲申極月廿三日

裏に連名あり

平四郎 九郎太郎 彦三郎 孫三郎 十郎太郎 太郎五郎 四郎太郎

石菖ノ石附

此所大沢村の名産之

清水所より湧出る所に石菖自然に生茂せり其所へ程よく丸く平の石を清水の中に浸し置其石へ小石菖を植付けば自然に菖根石に付てはなれざるを江戸へ出し四月頃より所々の縁日などにて植木屋あきなふは此所より出る物之

和泉村

世田ヶ谷領古名は出水と書りとぞ此村内就泉寺境内より湧出し所々水田の助けとなりし也へ出水村とも書るなり此地の東南の瀬村小駒井村といふを小田原所領帳に二貫七百文駒井太田新六郎とあり瀬村の駒井の事なれども其地は旧跡と見えざれば別に出さゞる也是にいふとあり又此地荒に付古き大塚多しといふ是ある事なれども絶て古人の云傳へも少さて

古塚

大なるは六ヶ所 小なるは三ヶ所

亀塚

村内小名田中といふ所の畠の中にあり大きさ凡壱反歩程あり塚上雑木生茂せり高さ二丈余あり四足頭尾と見しくて山足あるなりに北より亀塚と号ぶ中古以来畠中也へ耕作の時々切崩し今は其山足なし丸き大塚となれり上古いかなる人の古墳なる哉更にその謂れも志れねど定て高貴の人の墳なるへし

冨士塚

古名は金堀塚と号ぶ其謂れは忘れねと思ふよし此塚の辺より金など堀出したる事ともあるなり 同村内小名原といふ所にあり廻り四拾間余高さ一丈余なり近来浅間を祀る也へ小冨士塚といふ之

此外は足なき形なき塚三四あり地所は下屋敷と号る鼎の角に鼎足の如く相並てあり各高さ八九尺許塚上に今は稲荷諏訪などの小祠を祀る其外に皆小塚は高四五尺以上なり百姓屋敷内或は田圃の畦にあり

邸迹

石谷氏の住居し地干今当邑の地所此地を下屋敷と号る寛永の中頃までは家居住居ありといふ広サ二町歩余

六郷用水

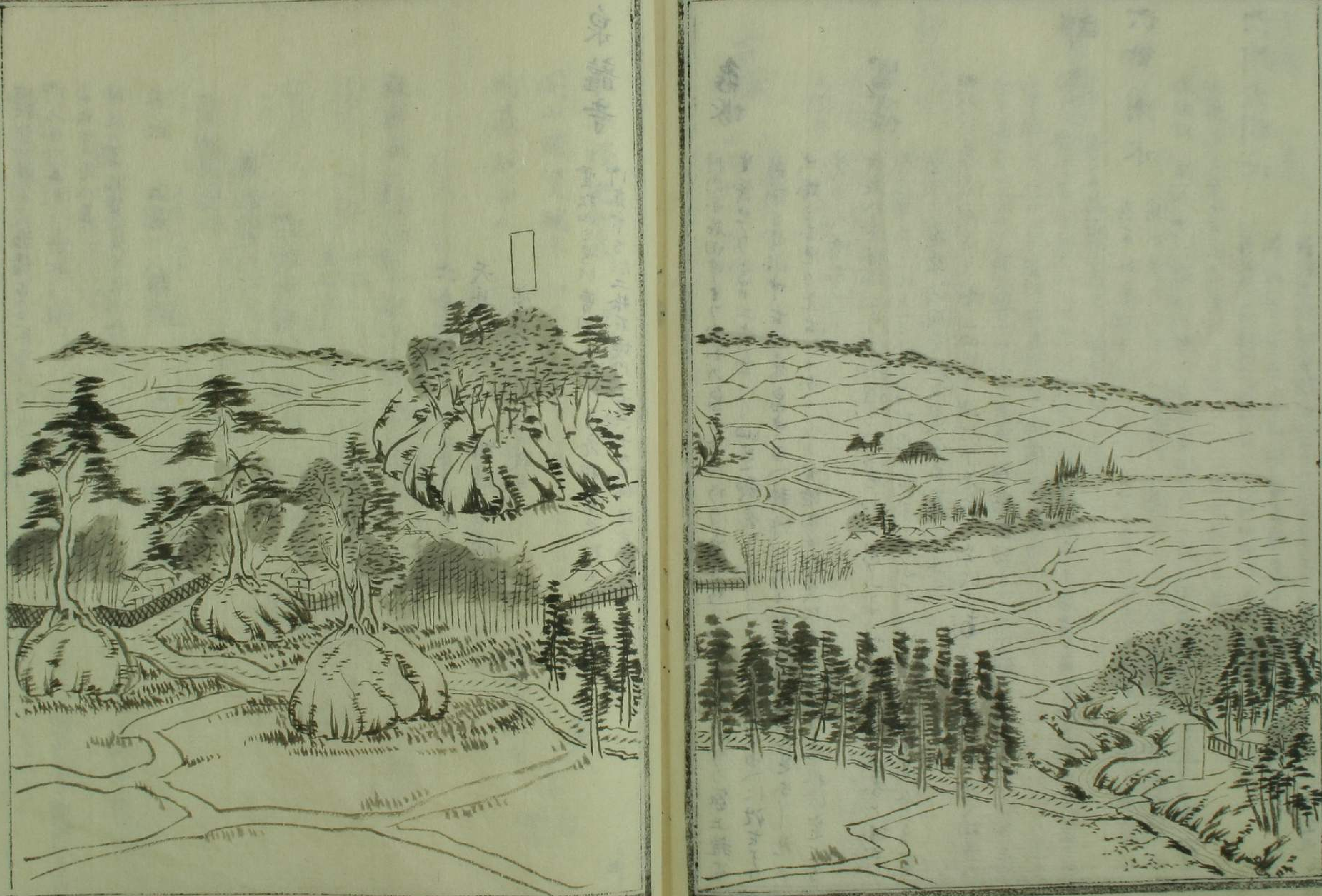
当所和泉村辺にて玉川引入夫より世田ヶ谷領の村々を経て所々の田用水落入て末は川の如し当所にても水巾三間許郡界荏原郡の蒲田村へ落入御入国後の御代官小泉次大夫といふ人堀割て水路を通し拾三村の田用水となれり古人其徳を賞して一名を次太夫堀といふ

六所大明神

当村内惣鎮守別当本山派修験小田原玉就坊配下行宝院

祭神国常立尊神体木立像 春日作 本地十一面観音なり

社地六拾坪余除地 例祭八月廿日十二座神楽執奏 社木松杉の森之



此社ハ石谷氏勧請せる所なり此人ハ
御入国後三州より此地に移りし氏神なれハ三州の六所大明神を勧請せり国朝旧事記
に云芝七八年
神祖大君将軍宣下の時御氏神三州六所大明神へ社領百六十石七斗御寄附の事
見へたり

本社　上屋　拝殿　大門道　横十間長六十間 並木松数あり

六所明神棟札

奉勧請
六所大明神棟札
寛永十八辛巳年六月大吉日
大旦那　石谷友之助
大施主　石谷十藏
別当常泉院権大僧都法印慶祐
和泉猪ノ方支村氏子

石鳥居　高サ八尺余 ミカゲ石也　石柱左右に銘あり

六合仮曜　施主 藤原朝臣石谷十藏貞清
天長地久　華表一石新
惟徳惟神
慶安四辛卯初夏穀旦
玄活子書

泉龍寺

雲松山と号す曹洞宗相州高座郡座間村宗泉寺末
御朱印高所二拾石境内一万六千九百坪役末寺四ケ寺あり

本尊釈迦如来　木座像一尺余

開山鐵叟瑞牛和尚　慶長十七年十二月九日寂

開基石谷氏　和光院殿盛山道隆大居士　石谷十郎右エ門政清
天正二甲戌年四月十五日葬遠州西郷石谷邑
石谷三家共に当寺檀越先祖より代々の墳墓あり

客殿　玄関　書院　衆寮　鐘楼　四脚門　石谷位牌堂

庫裏　釣鐘　寄附　慶安元年八月二日 大旦那 石谷市右エ門尉正勝

境内

池　表門の前に在径十間余 中に弁才天の石祠あり

辨財天　木座像三寸余　良辨作
此像ハ池中石祠の本尊なりしを作仏なれハ客殿に安置
空殿に入置之

經塚　廻り五間余高サ九尺
客殿の西北の方一町半程を隔て境内の地也
伝云良辨僧正経巻を納めたる塚なれハ経塚と号す

地藏尊　木坐像長ケ一尺五寸 祖厨子入作不知　延命地蔵并客殿に安置

此地旅寓當寺住職太圓和尚念持佛なりしが自然と信心の輩ありて安永の頃より
を村鄕里へ請待なし夫より次第に繁栄になりて江戸なとにも講中の輩ありて月々
世話人を立て江戸表近御巡行なさる毎月廿四日ハ縁日にて其日にハ當寺へ帰られ又
廿四日ハ門前市町の如く諸々の商賣の店々を持はこび来詣の貴賤群集なさす又
廿八日より世話人講中相集て村々へ巡行する年ハ不絶なりめでたる奇瑞ありしとや

玉泉寺

熊埜山観音院と号す天台宗東叡山末 府中所深大寺頭りし
往古ハ小田原北条氏政より古刹也へに除地免四町四方の地詰ふといふ先年北条
家より寄附の地且川出水の砌悉く流亡し其後寺地を此所へ引移しと當時の寺地
ハ百姓地之先年流失の地も當寺今ハ大概二町余も有廃し是を境内附と号し地所
石谷所之助書附せよと走行る田畑二石免ありといふ 客殿 玄関 庫裏

起立ハ永正元年甲子十月といふ 開山尊祐法印 天文廿一壬子年十月三日示寂

本尊薬師如来 此佛像ハ中古以来本尊と成往古本尊ハ観音堂の觀音之

観音堂 境内ニあり

本尊十一面観世音 往古の寺本尊なりといふ 行基作
木立像二尺五寸厨子入
脇立龍樹菩薩 毘沙門天各壹尺二寸 木立像同作

位牌堂

本尊阿弥陀 木座像一尺五寸 恵心作

寺傳云今境内安置の観世音ハ天平年中行基大士の作にして国府一寺を草創し
安置ありしが堂宇も星霜を経て破壊におよび只尊像をのみ遺り廃寺と成りしを
天文年中尊祐法印再興をして其後又乱世續て無住の事久しく院内も又衰微
せしを今ハ小刹となりけるとぞ

白幡大明神

和泉村と猪ノ方村との境にあり社地ハ和泉村の界にて別當ハ和泉村
玉泉寺持
土人云祭神ハ源頼朝卿の霊を祀るといふ其謂ハ不知
神体ハ衣冠の像木座像五寸許之例祭九月十二日
本社六尺 上屋二間四方 石華表 高サ八尺 三カゲ石

古塚 九ケ所

猪の方村の内にあり
村長ヶ屋敷内に二ヶ所あり百姓屋敷に一ヶ所あり其余の塚ハ是ケ所之其所詳ならず
廻り三十間程高サ一丈余あり

同 拾一ケ所

猪の方村藤邑岩戸村といふ地にあり
此村内に塚小多し和泉猪の方岩戸此三ケ村ハ相並て僅に十四五町の内 大塚
廻り三十間より拾五間におよび高サ一丈五尺或ハ一丈程
廿三ケ所ありし是今おし潰て大蔵村に五ケ所ありし此外ハ皆百姓屋敷
内にあり其所詳ならず

同 五ケ所

大蔵村の内にあり同世田ヶ谷領にて此村ハ荏原郡界へ近し 塚廻り二十
間より或ハ十間に及る高サ一丈或ハ九尺程
村内路傍に二ヶ所あり百姓屋敷内に一ヶ所あり是を
坂等が時に其塚の内を

く刀の朽しハ埋む壺ハ今に村長の家に有りと　石を以て蓋を打けて其中より刀数本を抜き出せり腐朽して細々に打砕けり又是の如

喜多見村

古井戸跡ありもに其ありて小田原所領帳に小見とも出たり古へハ木田見とも書又喜田見又喜多見とかきたり

中古此所ハ江戸左近将監か末孫にて喜多見若狭守と号せる人住居の地にして今其人の居住跡を陣屋跡なと云つたへり中古江戸氏ハ此邊中丸郷とも唱へたり

氷川神社

別當禱善寺 喜多見村鎮守にて御朱印社領高拾石二斗余

本社 上屋 拝殿 大門道 左右杉の大木

石華表 高サ七尺八ヶ石あり喜多氏奉納

石柱に銘文あり

武藏國多摩郡喜多見村氷川大明神
承應三甲午年九月九日
當社依為余輩氏神而兄弟相議
建之以表微志者也
喜多見久大夫平重勝
喜多見五郎左エ門平重恒

棟札

聖主天中天 迦陵頻伽声 別當宮本坊 代官 香取新兵エ
奉再興氷川大明神社頭一宇天道如見納受所
哀愍衆生者我等今敬礼 大旦那 江戸刑部少輔頼忠 本願 斎藤道善同帯刀
永禄十三年庚午卯月二十七日 武藏下

禱善寺

普明山華厳院と号す天台宗深大寺末之 氷川別當

本尊 阿弥陀如来

開山權大僧都法印良尊和尚 長禄元年十月十七日寂

慶元寺

永劫山華林院と号す浄土宗寺地喜多見古居跡西の方之 御朱印高拾石境内除地二千四百三十坪社

本尊 阿弥陀如来 脇士 觀音 勢至 起立 文禄二年

開山眞蓮社空誉上人 遷化年月不知

客殿 玄関 庫裏 倉庫 方丈 鐘楼 表門 大門道

古石塔 一基 元弘三年八月と記して其餘ハ文字不知墓所にあり

喜多見氏の香華院なりといふ事にて此寺の過去帳に慶長の頃よりの法号を載たまへと代々此寺に葬せるにも有しなる由其法号ハ宗門にて号せし法名に有りし此寺にても此由を伝ふ所は江戸住居にて都下に香華院ありし故なり此寺の葬地に石塔なく元禄六年没落の時の人の法号を追福せし石塔を是此所に家臣なり有る人を伝せし者の建てる由其人の姓名有り香取和泉森内匠なといふ者にて今子孫氏あるによりて由を伝ふ

寶壽院　長徳山光傳寺といふ同慶元寺末へ　御朱印七石二斗　境内二千六百坪

本尊阿弥陀如来　脇士 観音 勢至　恵心作

起立 文禄十二年　開山雲蓮社西誉上人玉公和尚　天正六年十二月七日寂 寿百一歳

御霊権現　小祠　喜多見氏先祖の勧請せしなりといふ其喜多見氏は桓武平氏にて譲余右大将家の比の江戸太郎重長が末孫にて天正年中までは江戸を以氏としけり御其の社は平姓なりも先祖を祀りて所なり家絶てより今は此社も潰廃あり

喜多氏陣屋跡　同村内字陣屋といふ所廣廿九二町歩程　今は百姓地となる

同　下屋敷跡　同村慶元寺より辰巳の方廣九五町歩程　今は百姓畠地となる

喜多見氏の由来を繹るに伝へいふ江戸太郎重長は所沢右京亮良衛と畠山国清入道と謀を合せて延文中に新田義興を矢口の渡にて沈溺せし者なる其子孫たる由従昔より江戸に住居の人なれば江戸を以て氏とす其以来の人は彼家の系図を見されは不知夫より後小田原北条家に属したる江戸信濃守其子江戸刑部少輔頼忠其子江戸掃津守朝忠が時天正十八年豆州下田の城清の将として楯籠りけるが豊臣家の水軍の軍勢船坂安浜を取らして雲霞の如く軍船押寄るを見て朝忠とても不叶と思ひて城を捨て退散し小田原開城の後御當家へ被　召出幕下の士と成りける由此江戸掃津守朝忠の子若狭守勝忠の時に将軍家の御居城の地名なれば江戸といふ氏を憚りて居住せし地名を以て氏となし是より喜多見若狭守勝忠と号し其子同主水正重忠其子同小右衛門其子同久太夫其子同小隼人其子若狭守某が代に縁者たる者の罪に坐せられて元禄六年七月廿三日死を賜はりて家絶たりといふ

蛇除守（へびよけまもり）

喜多見の伊右衛門とて往古より家伝の秘法にて蛇よけの守を出し毎年四月八日に限り此一日のみ古来より近里の人々に授け何ふ其包を受る人に限りて式包は何れも初穂として銭百文を出す四月八日の一日なれば其日暁天より諸とひ来りて群集をなす真蛇（まむし）に喰れたる者其疵をおさへて伊右衛門が家に来たれは其痛やまぬに伊右衛門呪咀して速時に平癒する事実に希代の家伝なり此者氏を府彦を称し先祖府彦道善家系忠嘉といふ者此地の住人にて永禄二未年九月より此守を衆人に授け始しといふ其伝来せし謂れは不知此府彦道善といふ者村内鎮守氷川社の棟札に永禄年中再建せし署名有れは先年より此社の地士なり

宇奈根村（うなね）

喜多見村瀬邑にて南の方玉川渉なり今は玉川通村内となる土人云慶安の頃迄は荏原郡に入りしといふ江戸青山街道より三里許へ又云宇奈根と唱ふ事久しきものなれど上古の世には海比（うなひ）と号せしにや万葉の古訓なとにもそけるを夫が唱へを轉しうなにともいひ乃り歟上古に溝渠をうなにと唱へ乃ちゆきされ此辺玉川附の地にして平陸の古地なれば上古よりの溝なとのありし所に民居せしかは地の名をうなにと号しけるにや溝の事をも上代の和訓ようなにと唱へたり日本書紀云反正天皇四年冬十月掘石上溝（うなで）云云溝此をうなにと訓し字は十七の反切二さ

なまこいなり又轉してうなねとなりしは是も五音通して十二又子と相通せしなり永禄二年の小田原北条所領帳に九貫文百文宇奈根太田大炊亮と出たり

万葉十四

なりそひくうなひをさしてふまりのいとゝんとうよあかしこいえし よみ人不知

萬葉集に云宇奈比 藻塩草に云うなひハ武蔵云云

契仲云うなひといふ地名なりんといえり仙覚抄云なつそひくとは夏のせみなりせみをいふ夏麦秋とかくに麦のをといひ麦そひくとみていかならひうとつけたりそれを麻のおひたるをいふといふ也へなりせみをかりてのちにうちて皮を取すなをひくといふことあり

鎌田村

或云和名抄に出たる荏原郡中十石の御名の内満田(ぬまた)其地今なり如しもしくは満田の轉訛して鎌田といふよいはすやとハ之へこいまく其誤なる事ハ志れに世田ケ谷の時代ハ郡界にして荏原郡に接せり古地大蔵村と民戸入交りし地なり

吉祥院

東光山地蔵寺と号し新義真言宗橘樹郡稲毛領小杉村西明寺末なり 古刹なれとも衰廃し今ハ除地境内三反歩 什宝に古仏なる事なし

開基 行基菩薩 天平十二年開闢の尼僧と 本尊地蔵 木立像一尺七寸 行基作

寺宝

不動明王 良弁僧正作

歓喜天 弘法大師作

日輪弘法大師繪像 一軸 弘法大師自筆

七観音繪像 一軸 興教大師 筆

小机之内 為大道寺
一所貴貫文寄進
横山左衛門尉
之状如件
永禄元年 八月 氏康
石井八右衛門尉

此古文書ハ鎌田村の左左衛門といふ者氏を石井と号し小田原北条家に仕へ其子孫也へ文書をも所持すといへとも系図ホハなし

按ずるに大蔵村名主も先祖石井氏なりといへども実は他姓の者にて石井氏の一跡を相続せしさまにて先祖は一族の末なる歟

塚

二ヶ所　同村内地蔵寺と号せし墳地の側にあり廻十間許　高六尺程
又壱ヶ所は廻五間許　高四尺余
其謂れは知らずといへども村の字に地蔵寺と号せしは法華宗の吉祥院の旧地にて破壊の堂宇をこぼちて築たる塚なるべし

明照院

世田ヶ谷領入間村にあり　大悲山観音寺と号し天台宗深大寺末
甲州在中谷村下仙川村の間なり
中興開山秀海法印　永禄十二年八月二日寂

境内
観音堂　客殿の東の方に在　本尊十一面観音木立像　慈覚大師作
此観音は村内法守糟嶺明神の本地仏にて此観音の謂れにて山号寺号となせり

糟嶺大明神

村内鎮守別当明照院なり寺より南の方なる丘陵の地にあり石階廿九級上り社地にて松の古木囲一丈二三尺なる一株と其余大松雑樹数根繁茂
此糟嶺明神の謂れは此村の近き所に糟谷村といふあり今は粕の字を用ゆ粕谷村と号し糟と粕と同じくかすの字なれば義も同じ　粕谷村往昔鎌倉治世の頃糟谷三郎兼時といふ人住居の地なりしに今村名となれり其糟谷氏絶えし時此村に所する地なれば古地を忘れず此所に社地をもうけ先祖の霊を祀り氏とせし家の字を取りて

大蔵村

糟嶺明神と崇め祀れるなり
世田ヶ谷領なれど永禄の頃は荏原郡に属せし由　村内氷川社の棟札に見ゆ今も郡界の地にて荏原郡に接し玉川向は橘樹郡久地村なり此村内喜多見村と地入交れり　菱刈在石井土佐と称せし
一　大平清九郎といふ人当所に住し小田原に仕へ此地を領せし由古書に見へたり其文に大蔵村年貢四拾貫文皆済石井土佐新開分貫文とあり其余は畧す永禄二年十二月十八日大平清九郎とあり一本には大蔵村乃余分下至秀也云云永禄二年二月七日大平清九郎殿様康六判あり子孫今は荏原郡等々力村に住して古書二通所持せる由
一　此村の里長石井を称すれどもとは三河の産にして久保三郎左衛門藤原と号せし者なるに天正十一年七月十二日
神祖大君第三ノ御姫君にて督姫君小田原氏直へ御入輿の御時供奉せし　其内なりといふ小田原滅亡の後此地へ来りて石井内匠ゆかり一跡を譲て石井と称するよし

乳窟松

廻り二丈二尺許高数十尋枝幹ともに乳窟といふ名木なり神明宮の社頭にあり
社地は今破壊に及べり別当は村内永安寺といふ

氷川社

村内生土神にて松杉の社木繁茂をなし石階数十級を設く別当永安寺　古棟札を

武蔵国荏原郡石井土佐
大蔵村氷川大明神第四ノ宮
永禄八年乙丑正月十九日
神主　田中松井坊敬白

裏書に
石井内匠助平兼実敬白

永安寺　龍華山長寿院 天台宗府中称名寺末

本尊千手観世音　本尊像二尺五寸　恵心僧都作

不動明王　堂内に安置　運慶作

開山清山上人　至徳二年三月記之 寂不知

此堂門に古石塔あり延徳の文字見ゆる摩滅して分明ならず

池　村の南小名本村の内にあり字して池の淵といふ元年盲人溺死せしより名とぞ元来は多摩川の古流なり土人云喜多見慶元寺の境内を当村の本村へ係り流れし由今の宇奈根川は古への玉川跡なりといへり

古松　法当氷川の社地にあり方四丈ばかり

周囲二丈五尺余なり

塚　此所にありし此辺は前にも出せし如く大なる塚数ヶ所あり中古以来の中にあり上古の人の住居せし跡なる歟

字宮岩山と称周経二十間程高さ一丈許　又江戸道の小袋に三ヶ所各回りの高さ大ひさし

此内一ヶ所は畑となりて殊に成りたるを掘りしに鉄の古瓦なと出たりと又一ヶ所は本村百姓此内小なりしを先年掘穿しに甕一基或は古瓦刀剣の類などを出せり甕今尚石井氏の家にあり

相州街道　或は登戸街道とも横街道ともいへり実は江戸青山筋又世田ヶ谷領へより相州大山参詣道といへり荏原郡世田ヶ谷より当郡へ入横根並本より当村へ係り喜多見狛井へ出て玉川を渡る登戸の渡りといふ

宇奈根川　西の方宇奈根喜多見の堺より来る当所にて玉川へ落入一名は町田川とも呼ぶ

石薬師　古へ伝ふは古へ永安寺の前に薬師堂ありて霊験ありて四時参詣をなすもの多かりし故堂の後の丘地へ埋めたるが年経て傍へ其の舌ありしが又其石像を掘出せり自然石二尺七寸許今は永安寺の本堂に安置すと云ふ

瀬田　和名抄に出たる当郡中郷名十ヶ所の内瀬田と云は是なり今は当郡を出て荏原郡へ入て郡界をなせり大蔵瀬田横根ならびの瀬村と称するいつの頃よりか他郡に隷せしを一此村より東へ大割の名ある瀬村ならなり寺院多く寺院ある所の等なり当郡小も此所に祖師ヶ谷村上下あり又は瀬田東村と今は書きまた世田とも学びと書すなり又他郡なれども当郡へ近く接したる太子堂村或は随堂主あり村なとなり更にその停へ残せり

名産

蕎麦粉　府中領にて作れるを源大寺蕎麦と号し起下にて多く作る所なり

石菖　世田ヶ谷大蔵村ありし此地清泉多く石菖あり其石菖のまま〈へ平なり石を選ぶには悪しく菖根石に附てあれども此辺の名産なり江戸へおくして植木売のあきのふは皆此辺より出す

4 年 月

[illegible]廿九年五月十三日